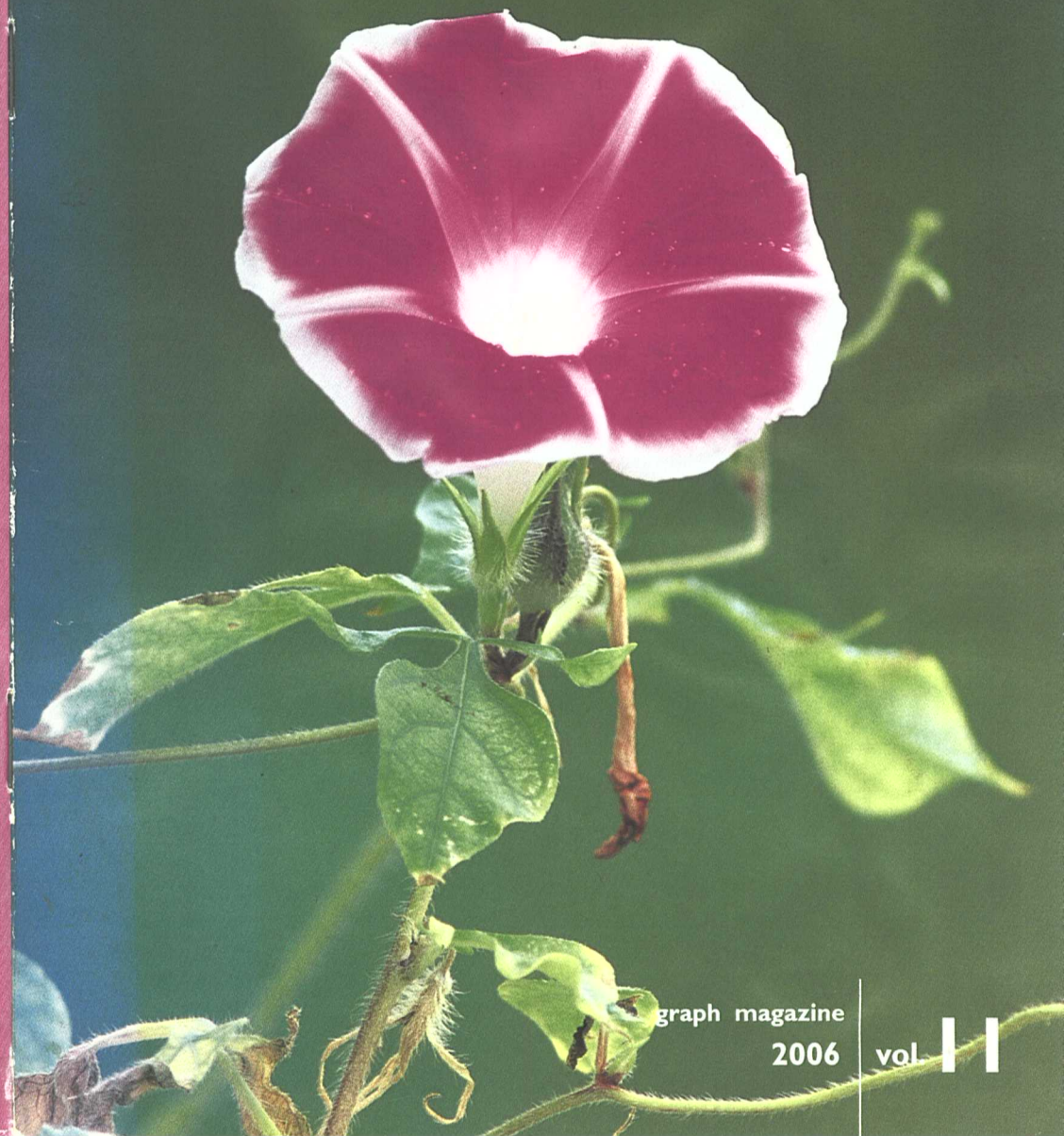
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



graph magazine

2006 vol. 11

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol. 11

定価100円（本体95円）

INDEX

巻頭メッセージ 04 どうしても必要な交わり／ゴットホルド・ベック

特集 12 「みことば」は生きて働く

3人のメッセージ 36 新しいいのちに生きる／辻 陽一郎

44 私たちはみんな地の塩、世の光／菊池 有恒

52 「彼もわたしとともに食事をする」／石塚 稔成

4人の証し 60 私の叫びを聞かれたイエス様／柿沼 勇一

63 語り尽くせない主の御計らい／柿沼 鳥子

68 私は主のものです／戸高 真美子

69 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう／樋田 久美子

連載メッセージ 72 [モーセの十戒] 第11回 神の聖なる戒め／ゴットホルド・ベック

メッセンジャー予定表 82 メッセージ当番表 2006年7月～9月

84 2006年下半期 よろこびの集い予定表

各地の集会から 86 こちら日立集会でーす

88 結婚・葬儀の報告

90 インフォメーション・ボックス

ケーキ 91 素朴なドイツのチーズケーキ

94 キリスト集会へのご案内

96 本の紹介

98 全国の集会住所録



Unser HERR lebt

主は生きておられる

vol. 11

巻頭メッセージ

どうしても必要な交わり

ゴットホルド・ベック

初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、――このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。――私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

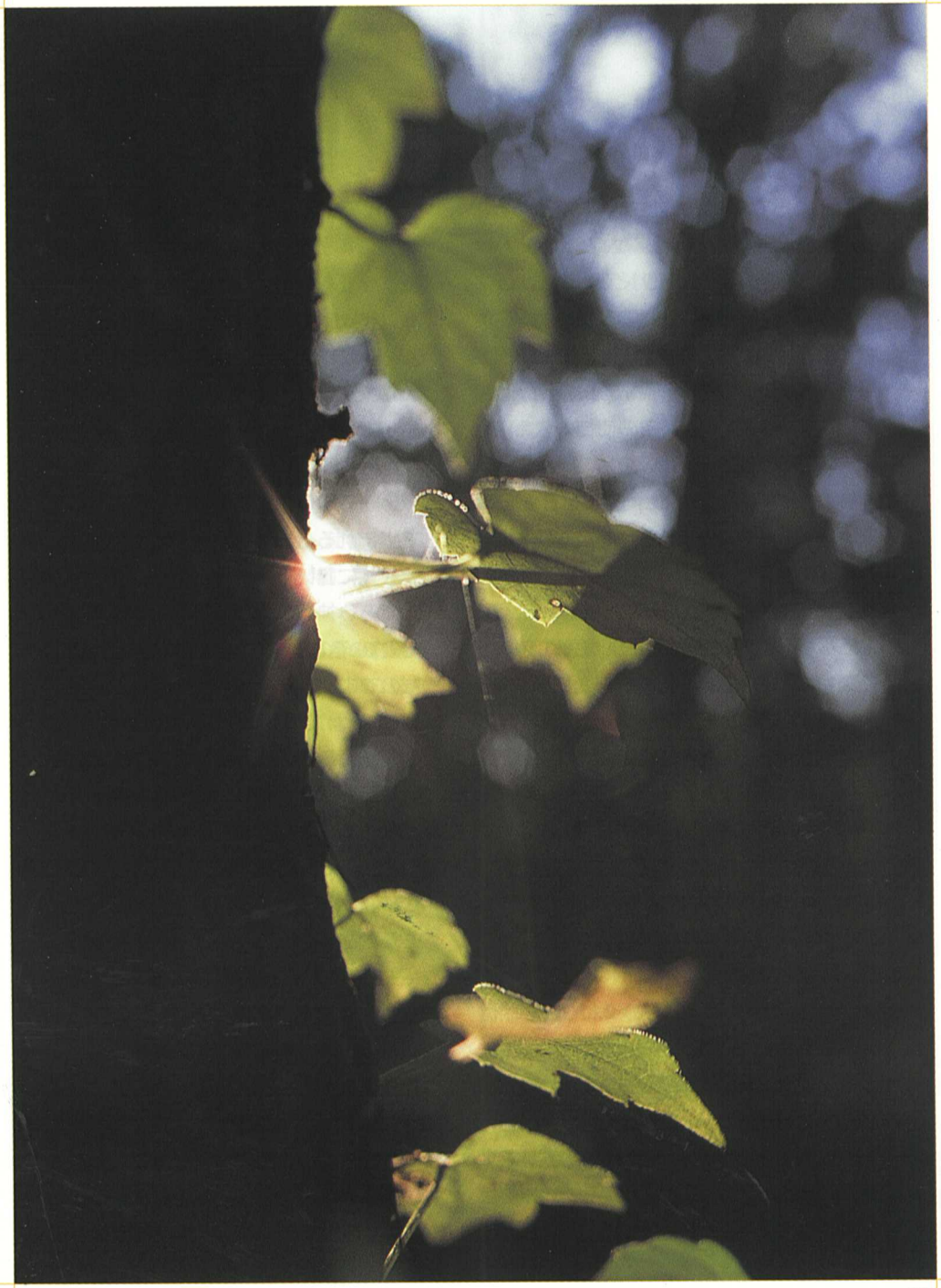
・・・神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（1ヨハネ1・1～4, 7）

孤独な人間にとって何よりも必要なものは主にある交わりではないでしょうか。「使徒の働き」に出てくるような、主の恵みによって救われた人々の真の「交わり」とは、どのようなものでしょうか。私たちはそれを知らなければなりません。

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

（使徒　2・42～47）



ここに出てくる信徒たちは、五旬節のときに救われた人々のことですが、ここで「彼らは使徒たちの教えを堅く守り」と書かれています。この使徒たちの教えとは何でしょうか。使徒が伝えたのは、主イエス様の教え、そして何よりも主イエス様ご自身でした。終わりの時代に生きている私たちは、この使徒の教えにとどまることが必要です。

しかし、私たちはそれと同時に信徒同士の交わりがどんなものであるかを知らなければなりません。

使徒の教えが主イエス様ご自身のことであるなら、信徒の交わりもまた、主イエス様との交わりを意味しています。

聖書にはただ一つの交わりだけが書かれています。それは、「御父および御子イエス・キリストとの交わり」です。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

（1コリント　1・9）

この御子、主イエス様との交わりこそが信徒同士の交わりの源です。しかし、私たちは本当に御父と御子イエス・キリストとの交わりを知っているのでしょうか。

この交わりは「いのちと霊との交わり」です。この交わりには暗いところが少しもありません。陰もありません。御父と御子イエス・キリストとの交わりには完全な信頼があります。御父は御子を心から信頼され、ご自分の計画をすべてお教えになり、御子にそれをゆだねられました。ご計画のすべてを、少しの不安もなく、ゆだねられたのです。一方、主イエス様の御父に対する態度もまったく同じでした。主イエス様は父なる神に完全によりたのみ、露ほども疑わず、父の御心を行なわれました。深い悩みの中にあるときも、十字架に向かって歩まれるときも、少しも疑わず、完全な信頼を父に置いておられました。主イエス様と父である神は、お互いに深く信頼しておられたので、その間にはいつも平安と静けさがあったのです。このお互いの信頼こそが「交わり」です。

この御父と御子の素晴らしい交わりに、人も加わることができるとは、驚くべきことです。主がどうして私たちをこの交わりに加えてくださったのか、その理由を知ることはできません。ただ一つわかることは、計り知れない主のご愛のゆえであるということです。

主イエス様は、この交わりに私たちを招いてくださるために地上に来られました。主イエス様が地上におられたとき願っておられたことは、弟子たちがこの交わりに入れるようになることでした。

私たちも、救われるためにだけ、救われたわけではありません。この素晴らしい交わりにあずかるために救われたのです。私たちは良心の咎めを取り去られ、救いの確信を得ることのためだけに救われたのではなく、この交わりにあずかるために召されたのです。もし人が御父と御子イエス・キリストとの交わりに入れられたなら、「使徒の働き」にある「信徒の交わり」に入れられたことになるのです。この信徒たちは決して特別な人々ではありませんでした。使徒たちにしても特別な人間ではありませんでした。では、使徒はどのようにして、使徒となったのでしょうか。使徒は主に選ばれ、主のみそばにいるよう特に召し出された人々です。

さて、イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来た。そこでイエスは十二弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。

（マルコ　3・13～15）

この箇所を見ると、主イエス様は先ず第一に、使徒たちをご自分の身近に置くために召されたことがわかります。その次に遣わすため召されました。主イエス様は、ご自分が永遠の昔からもっておられた父との交わりに使徒たちも入ることを願っておられたのです。主イエス様は、今も当時と同じようにこの交わりに私たちがあずかることを願っておられます。御父と御子イエス・キリストとの交わりにあずかることができるとは、なんという特権でしょうか。この交わりを喜ばずに、他のもので私たちが満足することがあるとすれば、それはとても残念なことです。

私たちは、主イエス様に仕えることが一番大切だと考えますが、主のお考えは違います。主イエス様は、先ず、私たちにご自分との交わりをもつことを求めておられます。人間は、熱心な働き人を見て良い働き人だと言いますが、主のお考えはそうではありません。一見、主のために熱心にご奉仕をしているように見えて、実は主との親しい交わりをもっていない人々がたくさんあります。これは本当に哀れなことです。私たちは弟子と同じように、この世と罪から逃れるために選び出されましたが、それだけではなく、御父と御子イエス・キリストとの交わりにあずかるために召されたのです。このことは非常に大切なことです。信徒の交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりであり、これは霊の交わりです。主イエス・キリストの身体なる教会の交わり、すなわち信徒の間の交わりは霊の交わりですから、そこには制限がなく、不安も、疑いもなく、信頼がなければならないはずです。この信頼の交わりに私たちは召されたのです。

しかし、問題はどうしたらこの「完全な信頼の交わり」に入ることができるかです。弟子たちも始めは、主イエス様と親しい交わりを持っていませんでした。最初は主イエス様とただ

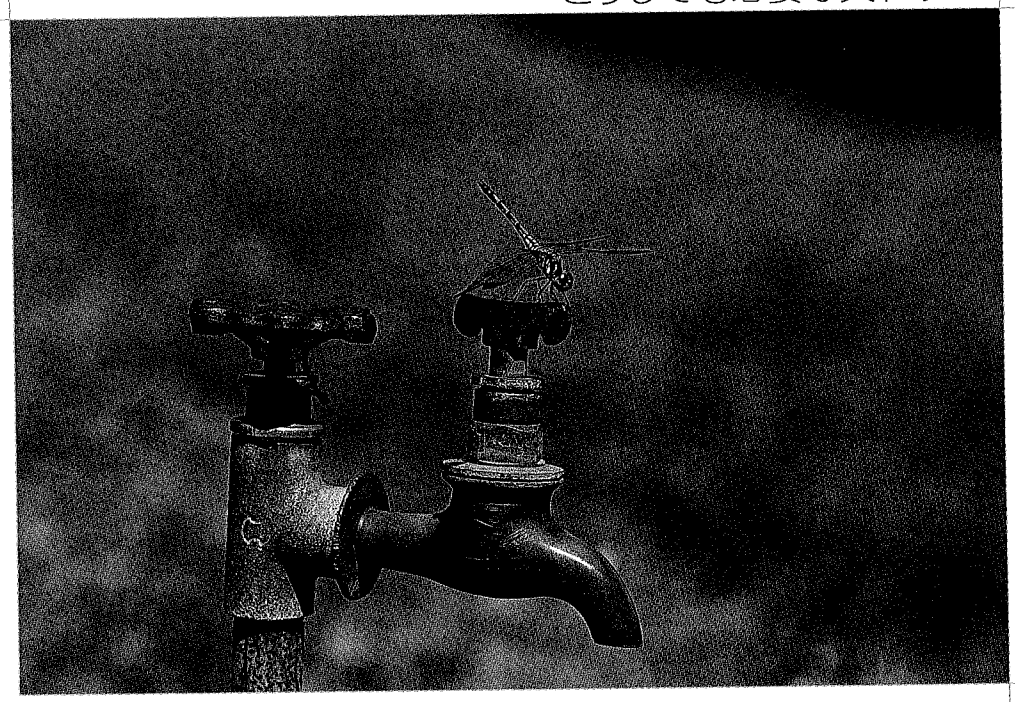
係わり合いがあるという程度でした。主イエス様に召されて3年間、彼らは主イエス様と共に生活しました。この間に、主イエス様はご自分の目的を弟子たちに明らかにするために、何とかして弟子たちと親しい交わりに入ろうとなさいました。そして、彼らを父である神との交わりに導こうとなさいましたが、彼らは理解できませんでした。主イエス様は、弟子たちと疑いが入る余地のない完全な信頼関係に達することを望まれたのですが、いざ、その深いみこころを示そうとなさると、弟子たちは主イエス様を誤解してしまったのです。それればかりでなく、弟子たちはお互いの間でも深い交わりがもてませんでした。単に、係わり合いがあるといった程度でした。彼らの間では時々言い争いもあり、主イエス様はその仲裁をしなければならなくなる有様でした。12人の弟子は、ユダを除いて心から主イエス様を愛していました。そのためにすべてを捨てて、従ってきたのでした。それにもかかわらず、彼らの間には真の交わりがありませんでした。お互いに妬み、誤解し、争いあうこともあったのです。ヤコブとヨハネは、自分たちが一番偉くなりたいと思い、他の弟子たちをのけ者にして二人だけで相談しました。

さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」
しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」彼らは「できます。」と言った。イエスは言われた。「なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです。」十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。

（マルコ　10・35～41）

このように、弟子たちの間には、真の交わりがなかったのです。しかし、やがて「五旬節の日」が来たとき、弟子たちは変わりました。この時から、彼らは真の交わりを持つようになったのです。ペテロが立ち上がったとき、他の11人も共に立ち上がったと使徒の働きに書かれています。「そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った」（使徒2・14）これは、事前にそのような相談をしていたわけではありません。

どうしても必要な交わり



自発的に自然にそうなったのです。12人の使徒は、もはやバラバラではなく、12人で一つの身体を築いたのです。この日の立役者はなるほどペテロでしたが、聖書を見るとペテロだけが目立ったわけではないことがわかります。人々はペテロと他の使徒たちを見て驚いたのです。

五旬節の日は教会の誕生日です。この教会が真の教会です。一つの宗教団体でもなければ、一つの組織でもありません。この時から、信ずる者たちはもはやひとりひとりがバラバラではなく、主イエス様を頭とする身体に綴りあわされたのです。ペテロと他の使徒たちは一つでした。霊の交わりをもっていました。使徒たちはお互いに心から信頼しあい、そこには疑い、恐れ、争いといったことは見受けられませんでした。五旬節の前には、このような交わりは天の父なる神と主イエス様との間にしかありませんでしたが、この日からは、多くの人々が真の交わりに入ることになったのです。「その日、三千人ほどが弟子に加えられた。そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし」（使徒2・41、42）と書かれています。彼らは、主イエス様のみことばを自らの生活の基準として受け入れ、自分たちはすでに信徒の交わりにあずかっているという自覚を持っていました。この交わりは外からきたのではなく、内にすでにおられる御霊のゆえに生まれた交わりです。

からだは一つ、御霊は一つです。あなた



がたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。
主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。
（エペソ　4・4〜6）

これこそが、彼らが一つになり、親しい交わりをもつ源でした。交わりとは、すべてのものを共有するということです。初代教会の兄弟姉妹たちはそうしていました。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。」（使徒2・44）誰も自分の所有権を主張するものはなく、「毎日、心を一つにして」（使徒2・46）いたと書かれています。霊において一つであったばかりではなく、考えも、願いも、心も一つでした。これこそ、信徒の交わりであり、主イエス・キリストの身体としてあるべき姿です。私たち一人一人も、使徒たちの教えを堅く守り、信徒の「交わり」を共有する状態になれたら、これほど幸いなことはありません。

使徒たちは主イエス様と共に過ごした3年間、この真の交わりを知らずに過ごしていました。これは交わりに入る準備の時だったのです。この3年の年月は実りのない3年間のように見えますが、この3年の間に彼らの古い性質は少しずつ取り除かれて行きました。もし、弟子たちが主イエス様に従わず、自分の職業を持っていたら、信仰の深い敬虔な人として尊敬されながら生涯を終えたことでしょう。しかし、主イエス様と共に歩んだ彼らは、己の本当の姿を教えられ、主のみそばで本質的に作り変えられていきました。

主の光に照らされ、彼らの心の暗いところはだんだん取り除かれ、明るみに出されてきました。彼らの心の中の隠された思いが現わされてきました。もちろん、弟子たちは他の人々より悪い人々ではありませんでした。しかし、主の光に照らされたとき、絶望的な自分の真実の姿を知らされたのでした。主イエス様が十字架におかかりになった時、彼らはまったく絶望してしまいました。その時、弟子たちはバラバラになり、逃げてしまいました。

「交わり」の秘密はどこにあるのでしょうか。

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
（1ヨハネ　1・7）

しかし、今私たちがもっている悩みは、光の中を歩むどころか光の中に立つことすらできない状態にあることではないでしょうか。主イエス様の光に照らされると、私たちの生まれながらの性質は徹底的に駄目であり、役に立たない、汚れたものであることがわかります。もし、主イエス様との交わりが正しくなれば、お互いの交わりも正しくなります。私たちは、一つの身体となるように、御霊を上に注がれ、真のバプテスマを受けました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。
（ガラテヤ　2・20）

この事実が土台となってはじめて、真の交わりが生まれてきます。私たちが日々この立場をとり、この事実を認め、主の御前にすべてを明け渡す時、御霊はあふれる恵みで私たちを満たしてくださり、御父と御子イエス・キリストとの豊かな交わりにあずからせてくださいます。この交わりは1.「光の交わり」であり、2.「いのちの交わり」であり、また3.「愛の交わり」です。もし、この交わりが私たちの中に起きると、「主が、そこにおられる！」と呼ばれるほどに、主の御栄えを現わす私たちとなることができます。「神の家」とは、生きた神の教会のことであって、それは真理の柱、真理の基礎なのです。

私たちの集まりも、このような集会になれるように、心から主に願いましょう。私たちを召してくださり、御父と御子イエス・キリストとの交わりに入れてくださった主に心からの感謝を捧げましょう。

どうしても必要な交わり

聖書のことばは一言一句、神のことば、みことばと呼ばれます。
神が、人間の手を用いて書かれた、としか考えられないからです。
千数百年の間に四十人もの著者が記した書物であるのに、
全巻の内容が首尾一貫していること、聖書の中の多くの預言が
成就していること、人の考えをはるかに超える事柄が
書かれていることなどが、「神の書」であることを雄弁に語っています。

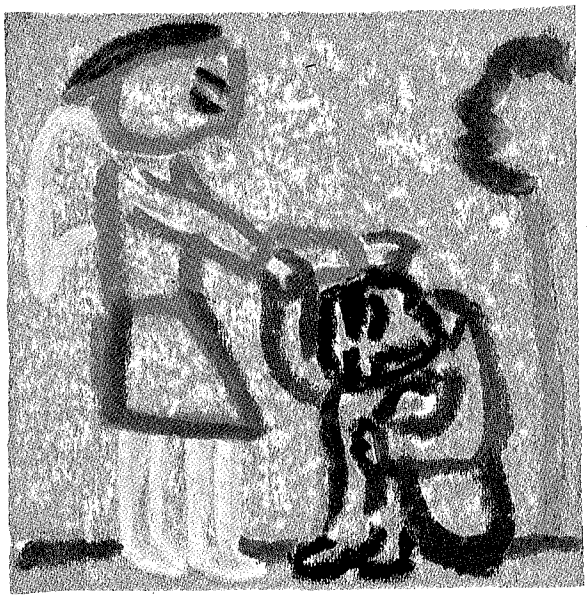
特集

「みことば」は生きて働く

聖書自体も
「聖書はすべて、神の霊感による」(2テモテ　3·16)と言っています。
そして多くの人が、みことばには力があり、
みことばが生きて働くことを体験しています。
それらの体験の数々を、
キリスト集会の方々に「証し」していただきました。

「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに。』と言って笑うのか。主に不可能なことがあろうか。」
(創世記　18·13、14)

結婚して10年、3回目の人工授精を受けようかどうかと迷っていた時に、再びこのみことばに出会いました。それまでは同じみことばを、自分の都合のよいように解釈して握りしめていましたので、いつまでたっても本当の心の解放を得られずにいました。そんな私に突然、このみことばが迫ってきたのです。そして「不可能はないと言われるイエス様を信じ、すべてをお任せします」と祈ることができた瞬間、涙が流れ、私は完全に解放されました。みことばに心から感謝しました。子どもは授かりませんでしたが、何よりも望んでいた心の平安が得られたことは、大きな喜びでした。　寺門たづ子(吉祥寺)



あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。
(詩篇 73·23)

●●●●●

主は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。主は、貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのです。　(1サムエル　2·6、7)

ことがうまくいくとすぐに高ぶる者となり、自分の力を頼りとする。うまくいかなければ挫けたり、あるいは原因を他に求めて自分を守ろうとする。そんなずるくて脆い自分、罪の塊である自分に、毎日気づかされます。
しかし、良いことも悪いことも、必ずその裏側には主の意図があり主の配慮と働きがあると、このみことばを通して感じます。そして、そのこと自体が主の憐れみだと思います。人の思いは勝手なもので、つねに揺れ動き、正しい場所に留まってはいません。でも、みことばは、そんなどうしようもない私をも、揺るぐことがない主に繋ぎ止めてくださる錨です。日々、新たに、

一方的な主の愛に気づかされます。

井上浩一(吉祥寺)

●●●●●

その子の母親は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」　(2列王記　4·30)

私どもに初孫(男児)が与えられたのは、ほぼ8年前のことでした。しかし彼は生後すぐに原因不明の病にかかり、病院を二つも転院し、ずっと留め置かれました。約2ヶ月後のある夏の朝、このシュネムの女に与えられた子の記事に出会いました。夢中で読みました。エリシャの祈りによって、一度死んだこの子が生き返るのを知り、思わずひれ伏し主に感謝しました。その日の午後、孫は無事家に帰され母親の胸に抱かれました。彼はいま元気に小学校に通っています。　青柳　惇(吉祥寺)

●●●●●

神は人のたましいが、よみの穴に、はいらないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。あるいは、人を床の上で痛みによって責め、その骨の多くをしびれさせる。彼のいのちは食物をいとい、そのたましいはうまい物をいとう。その肉は衰え果てて見えなくなり、見えなかった骨があらわになる。そのたましいはよみの穴に近づき、そのいのちは殺す者たちに近づく。もし彼のそばに、ひとりの御使い、すなわち千人にひとりの代言者がおり、それが人に代わってその正しさを告げてくれるなら、神は彼をあわれんで仰せられる。「彼を救って、よみの穴に下って行かないようにせよ。わたしは身代金を得た。」彼の肉は幼子のように、まるまる太り、彼は青年のころに返る。彼が神に祈ると、彼は受け入れられる。

(ヨブ　33·18～26)

受験勉強で疲れ果てて神経衰弱し、さまざまな症状に苦しみ食事も取れずどんどん痩せていった時に与えられたみことばです。その後、死をも覚悟するどん底までいってしまい、もう手遅れではないかという絶望の淵で主に叫んだときから、奇跡的に回復させていただきました。まさにみことばの通りになりました。みことばの力と真実を身を持って体験し、イエス様の偉大さ素晴らしさを一層知ることになりました。

江藤尚広(吉祥寺)

●●●●●

平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。　(詩篇　4·8)

イエス様を信じる前の私は、ささいな仕事の問題にも思い悩み、時には一晩中眠れないこともありました。救われた後でも相変わらずすぐに思い煩う者です。けれども「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト·イエスにあって守ってくれます。」(ピリピ　4·6、7)という聖書のみことばを確信していますので、寝つきが悪い時には『イエス様。私の悩みを知ってください。あなたが助けてくださり、良いように導いてください。どうぞ静かに眠りにつかせてください。』と祈ります。いつの間にか平安が与えられ、眠りについています。感謝です。辻田浩康(吉祥寺)

●●●●●

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。　(詩篇　27·1)

目の前で、おばあさんがバイクにはねられました。後日、証言してもらうかもしれないと言われ、証言する責任が大きな重荷となってのしかかって来ました。思い煩いが増し、心身ともに疲れ果て、具合が悪くなり、事故の様子も思い出されて不安と恐怖に襲われました。祈ろうとしても集中できず、もし横になったら二度と起き上がれないかもしれない、と思うほどでした。でも、本当にもうだめだと思った時、毎朝読んでいる「日々の光」のみことばを、読んでいなかったことに気づきました。その日(10月22日朝)のページを開くと、冒頭のみことばが目に飛び込んで来ました。その瞬間、暗闇が光に変ったのです。みことばが立ち上がって私をつかみ、光の中に投げ入れてくださいました。恐怖は消え、喜びでいっぱいになりました。

遠藤幸子(市川)

●●●●●

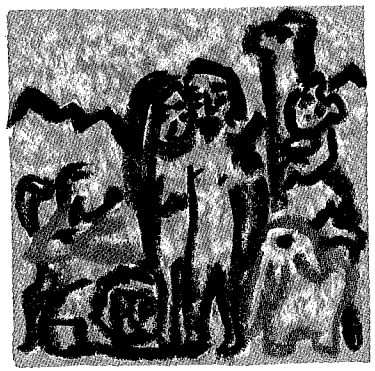
いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。

(詩篇36:9)

自分の力でイエス様に従っていこう、頑張って信仰を保とう、としていた思いから解放してくれたのが上記のみことばです。弱さや悩みを抱えたまま「イエス様の光のうちに導いてください」と、おゆだねできる恵みに、感謝しかありません。イエス様の光の中で生かされていることは、本当に幸せです。　和田周作(吉祥寺)

●●●●●

なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心の中にシオンへの大路のある人は。彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。　(詩篇　84·5、6)



われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう
(創世記 1·26)

恵まれた生活の中で、私たち夫婦の悩みは子どもがいないことでした。子どもがいないのは「涙の谷」でしたが、このことをイエス様の助けによって受け入れるならば、イエス様は私たちに祝福の泉を与えてくださるのではないかと、このみことばをいただいて、思えるようになりました。主は私たちに必要なものだけではなく、私たちにとって最善なものを備えてくださる。主はすべてをご存知ですから安心してすべてを任せられる。このように考えることができるのは、主イエス様を知っている者の特権だと思います。　羽石スザンネ（御代田）

● ● ● ● ●

主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。
（詩篇 103・14）

ある方からいただいた絵葉書に書かれていたみことばです。そのころおおむね順調な毎日で高ぶりやすい状況にあった私に、主が語ってくださったように感じ、とても心に響きました。私を造られた主は、私のすべてをご存知で、しかも私のすべてとはちりにすぎない。このことに立ち返ったとき、イエス様ごめんなさい、と主の前にひれ伏す気持ちでした。また、「心に留めておられる」というやさしいことばから、主ご自身が深いあわれみといつくしみをもって弱い私をそのまま受け入れ、導いてくださると確信でき、平安を与えられました。いただいた絵葉書を度々眺め、時に戒めとなり、時に励ましとなるこのみことばに頼ることによって、主の守りを体験しました。　江藤 絵里（吉祥寺）

● ● ● ● ●

まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。　（詩篇 119・24）

海外で一人暮らしを始めるようになって、目に焼きついた聖句です。相談相手の少ない日常生活の中で、ありのままの状態を正直に主に相談することが、いかに大切であるかを実感させられたためではないか、と思います。物事に迅速・柔軟に対応することが求められている現代生活の中で、「主が自分に何を示してくださるのか」と意識することがいかに少ないか、ともすれば乏しい知識や経験で問題を解決しようとする、そのような自分の姿に気づかされたとき、主との静かな交わりである祈りでさえも、ついでにという感覚で「題目」を唱えるようになっていることを、このみことばで知ることができました。そして、祈りによって相談したときに主が答えてくださったこと、問題を主に預けたときに平安が得られたことなどを体験して、一番大好きなみことばとなりました。
和田宗勝（ミュンヘン在住）

● ● ● ● ●

わきまえのない者たち。あなたがたは、いつまで、わきまえのないことを好むのか。あざける者は、いつまで、あざけりを楽しみ、愚かな者は、いつまで、知識を憎むのか。（箴言　1・22）

17年前、聖書を読み始めて間もない頃、与えられたみことばです。当時の私は、すべてを他人のせいにし、いつも自分のしたいことを最優先にする自己義認、自己中心のかたまりでした。10年間、常用して来た薬がやめられず、仕事も手につかず、妻からは離婚してほしいと言われて、初めて何のために生きているのか真剣に考え始めました。しかし、どこにも答えは見つからず途方に暮れていたとき、主はこのみことばを語ってくださったのです。わきまえのない者、あざける者、愚かな者とは、まさしく私のことであり、すべての問題は私に原因があることを気づかされました。そして「悪かったのは私です」とイエス様に謝りました。すべての問題の解決がここにありました。
室田勝美（吉祥寺）

● ● ● ● ●

自分の時が来ないのに、なぜ死のうとするのか。　（伝道者　7・17）

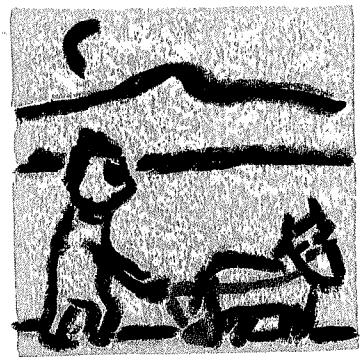
何十年もイエス様を信じたいと思いつつ信じきれず、人生に絶望していました。死にたいという気持ちに誘われ、仕事もミスばかり。なんとか迷想に落ち込まぬように通勤電車の中で文庫本に読むでもなく目を通していたとき聖書のみことばに気づいて、えっ！なんでこんな本にと思いました。その後、2冊目、3冊目、そして5冊目でもみことばが目に留まった時にハッとしました。イエス様は私を離さず、とらえていてくださっているのだ、と。帰宅して聖書を手に取り、ぱっと開いた箇所に上記の聖句がありました。もうびっくり。私の心を知っておられると思いました。イエス様への信頼と生きる希望が与えられました。大川原知代子（吉祥寺）

● ● ● ● ●

食事をするのは笑うため。（伝道者　10・19）

このみことばを初めて読んだ時、心の中にポッと暖かい灯火がともるような気がしました。食事という言葉は、聖書のいろいろな場面に出てきますが、いつも「親しい交わり」を表わしていることを知って、とてもうれしくなりました。また、娘が何年か前から言っていた「将来は食に関わる仕事をしたい」という志望が、主の御心に沿うことを、このみことばで確信できました。そして、娘の20歳の誕生日にこのみことばを贈りました。　大庭篤子（吉祥寺）

● ● ● ● ●



あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る
（創世記 3・19）

立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。　（イザヤ　30・15）

2人目の子どもが6カ月くらいの頃、家事と育児に追われ心身共に疲れていた時に励まされたみことばです。泣きすがるわが子を十分に受入れることができず、そのために家事も思うように進まず毎日いらいらしていました。子供が大好きで9年間保母の仕事にたずさわり自信もあったはずなのに、自分の子どもには思うように行かず、手が出ることさえありました。どうしてこんな事にと悩み、主人にこぼし、話し合っているうちに「家事も育児も自分のためではなく主のために」という思いを与えられ、楽になったことを覚えています。その時にこのみことばが心に響き、本当にその通りだと思わされました。一つ一つが感謝になり、子育てが本当に楽しいものに変わって、それ以来、大切なみことばとなりました。　佐山淳子（吉祥寺）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。（イザヤ　41・10）

いつも一人で階段を降りていたのですが、最近左足がこわばって降りられなくなり、夫の助けが必要となりました。7年前に与えられた左半身の不自由は、祈りながらのリハビリで、保護具を着けて歩けるまで回復しました。今回の試練は、私の身体と心を激しく打っていますが、「恐れるな。たじろぐな。」のみことばは大きな励ましになっています。必死に主に助けを祈り求めながら階段を昇り降りするたびに、このみことばが生きて働き、助けてくださることを実感し、感謝しています。　国川雅子（吉祥寺）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　（イザヤ　43・4）

物心がつく頃から両親の喧嘩が絶えずあり、愛し合って結婚した二人なのになぜだろう、人の愛はなんて変わりやすいのだろう、と思っていました。そして、喧嘩の後の言われた一言、「あんたなんか生まれなければ良かった。いなかったら離婚できてラクになれたのに」。私はずっと、生まれてきてはいけない存在だと思ってきました。このみことばは、私が17歳のとき出会い、救いに導いてくださった聖句です。私を愛してくださるお方がいる。そのお方は、こんな私の罪を贖うために十字架にかかってくださったことを知って、その日にイエス様を救い主として受け入れました。あれから20年、相変わらず人の言葉や態度で傷つき、自分で自分がいやになってしまう者ですが、イエス様は今日も「あなたを愛している」と言ってくださっています。ただ、ただ感謝です。　山本留美（大阪）

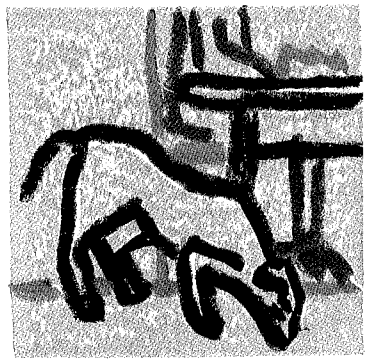
かつて私は絶望のあまり自ら命を絶とうとしたことがありました。大勢の人がいる中で私一人が生きていて何になるのだろう？生きている意味がわからなくなりました。でも、なぜかそのたびに止めるものがありました。このみことばが新しいいのちを与えてくださいました。このみことばをかみしめつつ祈りました。主がともにいてくださることが実感できました。
島貫充代（吉祥寺）

イエス様を信じて21年になりますが、何でもすぐ自分の重荷にしてしまう生まれながらの性格は変わっていません。数えきれないほどの恵みをイエス様からいただいているのに、体も心も弱い私は自分の無力に落胆してしまうのです。そんな時、いつもこのみことばに励まされます。イエス様は私がどんな状況にあろうと個人的に語りかけてくださり、「あなたは尊い、愛している」と言ってくださいます。これからもみことばを頼りに歩んで行きたいと思います。
白石万里子（吉祥寺）

見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。　（イザヤ　43・19）

人をさばくのは主である、と知っていながら、つい姑をさばいてしまう私でした。そのことを何度後悔しても、心からへりくだり謝ることはできませんでした。そんな私を、普段は穏やかな夫が初めて蹴り、「出て行け！」と言いました。このみことばは、その時、キリスト集会の友人を通して与えられたものです。私はハッとしました。不従順な私に、主が「もうすぐ天国の扉を閉じてしまうぞ」と警告しておられる、と思わされたのです。早く早く謝らなければ、と帰宅し、姑と夫に「申し訳ありませんでした。親を敬え、夫に従え、と聖書にあるのに、私にはできませんでした。でも、これからもイエス様に従いたいので、許してください。もう一度、一緒に生活させてください」と言うことができました。平成14年1月19日。姑と和解できた記念日です。翌年の5月、母は「ありがとう」と言って、天の御国に召されました。みことばに心から感謝しました。
河野愛子（宇都宮）

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。
（イザヤ　49・15）



小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます
（マタイ　15・27）

生後1年8カ月で生みの親と別離した私は、その体験が尾を引き、いつもある種の虚しさを心に感じていました。そんな私に、家内が贈ってくれたのが上記のみことばです。1985年10月26日、私たちが信仰に導かれるきっかけとなった日航ジャンボ機墜落事故の2カ月半後のことでした。私は言葉に尽くせぬ喜びに満たされました。実の母親よりも深く愛してくださる方がおられる、その方こそ主イエス様であり、ご自身の愛を十字架の犠牲の死を通して表わしてくださったのだ、ということが心にしみわたりました。そのとき、心の中にくすぶっていた母への複雑な思いが消えただけでなく、その母にイエス様を伝えたいという気持ちが芽生えたのです。自分自身驚くばかりでした。そして主はその願いを現実のものとしてくださいました。　和田芳明（吉祥寺）

● ● ● ● ●

ひとりっ子として大切に育てていただいた私ですが、成長するにつれて母との間に何か溝があるのを感じるようになりました。もらい子であったことを知ったのは、結婚して子どもを持ってからでした。平成元年に家族そろってイエス様を信じる者とされ、このみことばに出会いました。それまでは、生みの親に会えないことを寂しく思っていましたが、イエス様がずっと忘れずに支え守ってくださっていたことを知り、うれしくなりました。しばらくして、思いがけない方法で50年ぶりに生みの母に会うことができ、母は「一度も忘れたことがなかった」と喜んでくれました。その母も、養父母もイエス様の救いに預かり、今はともに天国にいます。
加藤宏子（芦屋）

● ● ● ● ●

主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。　（イザヤ55:7）

イエス様の光が当てられるとき、自分の罪深さ、汚さにショックを受けます。でも、この罪や過ちが、イエス様の十字架の血潮によって赦されていることを、このみことばから思わされて、主の大きな憐れみに感謝しかありません。イエス様に「ごめんなさい」を言って、また新しく始められることは、本当に幸いです。
和田亮子（吉祥寺）

● ● ● ● ●

イスラエルよ。もし帰るのなら、―主の御告げ。―わたしのところに帰って来い。もし、あなたの忌むべき物をわたしの前から除くなら、あなたは迷うことはない。　（エレミヤ　4・1）

親しかった友人がキリスト集会を離れたとき、その人について集会から3年半、離れていました。しかし、心に平安がなく、その後、集会の方々との交わりが与えられ、戻るべきかどうか迷っていました。そんなとき、このみことばに出会い、迷いがふっきれて決心がつきました。思い煩いはありましたが、踏み出せました。キリストのからだの一部であることを忘れ、勝手に、祈ることもせずに離れたこと、主を悲しませたことを思わされて、顔を上げられませんでした。「イエス様、わたしはあなたに罪を犯しました。赦してください」と悔い改め、憐れみによって、もう戻れないだろうと思っていた集会へ戻ることができました。多くの人から祈られていたことにも感謝しています。　小泉幸子（吉祥寺）

● ● ● ● ●

必ずわたしはあなたを解き放って、しあわせにする。　（エレミヤ　15・11）

信仰をいただいていながら、目先の出来事に思い煩っていた私に、平安の杭（くい）を打ち込んでくださったみことばです。なんという心強い希望に満ちたお約束でしょうか。ご真実で聖なる全能の神が宣言されているのです。心がパッと明るくなり、小躍りしました。罪深い私を一方的に愛し、かたく守ってくださる主イエス様に感謝し、御名を心から賛美します。
沼津孝雄（熊本）

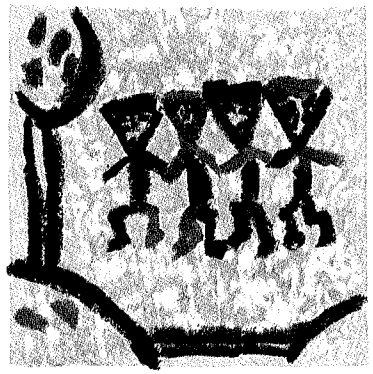
● ● ● ● ●

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。
――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
（エレミヤ　29・11）

大学時代、将来の進路について悩んでいたとき、英会話を習っていた宣教師の方からいただいたみことばです。初めは、私のような者に聖書のことばは当てはまらない、と思っていましたが、ある日、一つの出来事を通して、スーっと心に入ってきました。自分の思い通りにならないその出来事を、神様が起こされたものと受け取ったとき、心が軽く羽ばたいて、まるで魔法にかかったように、思い煩いから解放されたのです。今思うと、神様に信頼しゆだねた第一歩であり、聖霊様が働かれた瞬間でした。以来、神様を信じて歩む喜びを与えられ、さまざまな事柄を感謝して受け取れるように変えられています。　南村かおり（土浦）

● ● ● ● ●

地を造られた主、それを形造って確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答



天の御国はこのような者たちの国なのです
（マタイ 19・14）

え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。
（エレミヤ　33・2、3）

仕事上の問題や対人関係で、ゆううつになることがあります。そのような時、このみことばの約束は、強い支えになっています。静まって祈ると、主は必ず答えてくださることを、体験しているからです。思いがけないアドバイスで問題の壁を乗り越えられたり、会話の機会が備えられて誤解が解けたり……。仕事に限らず、日々の生活でも同じような主の恵みを実感しています。　大庭俊明（吉祥寺）

●●●●●

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。　（ミカ　6・8）

同居していた主人の母が認知症と骨折、肝臓がんも重なって入院し、その後に、老人病院へ転院するか自宅で介護するかの選択を迫られたときのことです。本人も親族も自宅介護を望んでいましたが、それを承知で私はく主人は海外赴任中、子どもは男の子だし、専門家にみていただくのが一番＞などと、したくない理由づけをして悩んでいました。病院に返事をする日の朝、たまたまセットしてあった聖書のメッセージ・テープから「人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか」のみことばが耳に飛び込んできて、主に従う決心が与えられ、晴れやかな気持になりました。そして、寝たきりの母を感謝をもって介護することができました。　続木絹子（吉祥寺）

●●●●●

こうしてわたしをためしてみよ。――万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。
（マラキ　3・10）

4年前結婚式を控えて、少し前から信仰を持ち始めた息子は、結婚相手も主を受け入れてほしいと願っていました。しかし、彼女はどうして結婚に信仰が必要なのと反発して、二人の間に激しい戦いがありました。私たちもいろいろ思い煩う日々でした。その頃私は原因不明の背中の疼痛と皮膚の炎症に加え微熱が続き、外出もできず約一カ月半、主の前にただ静まって祈る時を備えられました。主にゆだねますと言いながら、何かある毎に自力に頼ろうとする不信仰な私に、このみことばが飛び込んできました。悔い改めに導かれました。主は彼女に働いてくださり、彼女は主の導きに感謝する者へと変えられました。こうして二人は主の豊かな祝福のもとに結婚式を迎えることができ、私の体調も嘘のように良くなっていました。
青柳慧子（吉祥寺）

●●●●●

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。　（マタイ　6・30）

「意志あれば道あり」を信条に、自己実現のこの世の闇に迷い、虚しく苦闘していた私に、ふと語りかけられたイエス様の呼びかけでした。エエッ？そんなことがあるのか、と思いました。今まで知ろうともしなかった、おおらかで、別の世界から漏れてくる、ふしぎなみことばでした。そして、その奥に、神様のいつくしみの眼差しを感じました。これは何だろう？と思ってイエス様に近づいていきました。以来28年、イエス様は本当の幸せの中に、いのちの中に、私と家族を移してくださいました。この喜びは、とても言葉なんかでは言い表わせません。みなさま、どうか聖書を開いてイエス様とお話をしてみてください！　酒井千尋（吉祥寺）

●●●●●

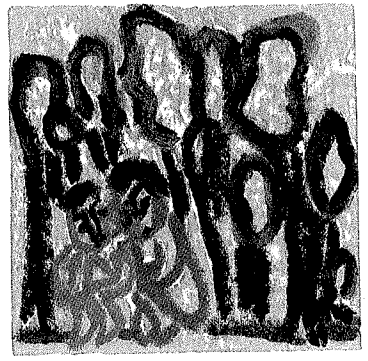
だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。　（マタイ　6・34）

小学1年生のとき、登校拒否を通してイエス様を知った娘は、「イエス様が一緒に行ってくださる」ことを支えに、なんとか通学していました。しかし、2年生の夏休み最後の日、翌日からの学校のことが不安なのか「お腹が痛い、頭が痛い」と言い出しました。私は「親として何もできません。よろしくお願いします」と、イエス様に祈り続けました。すると突然、娘が「ママ、このみことば、私のためみたい」と言って、上のみことばを見せてくれたのです。それは、日曜学校でいただいたカードに書かれていました。その瞬間から夜寝るまで、娘は何もなかったように平安でした。でも、布団に入ってから祈っていましたので、本当は心配なのだなと思い、「なんて祈ったの」と聞くと、娘の答えは「今日は素敵なみことばをありがとう」でした。私はみことばの力に圧倒されながら自分の不信仰と愚かさを悔い改めました。娘は今22歳、このみことばと共に歩んでいます。　高山洋子（吉祥寺）

●●●●●

子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。　（マタイ　9・2）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがた



「あなたは、どこにいるのか。」（創世記 3・9）

を休ませてあげます。　（マタイ　11・28）

18年前、長い海外勤務を終えて帰国した夫が、過労死しました。自責の念と心の重荷を抱えて、この先どうして生きていこうかと途方にくれていた時、ふと手にした本の中にこの二つのみことばを見つけました。とても不思議な権威があり、人間に言える言葉ではないと直感しました。これが聖書を知りたいと思うきっかけになりました。絶対的な罪の赦しが、イエス様によってすでに用意されていたとは驚くべきことでした。そのうえ、自分で自分を変えられない私に、新しいいのちをも与えられました。イエス様を知ることは、私の心の楽しみ、喜びとなりました。主が私になさったことは、すべて私の益のためだったと確信し、感謝しています。

久保和子（吉祥寺）

● ● ● ● ●

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。　（マタイ　9・13）

私はイエス様と出会う前、クリスチャンとは、清く正しい人だけがなれる者と思い込んでいました。わがままで、高ぶって、いつも後悔をしていた私には無縁である、と。20歳の頃、間借りをしていたイギリスの家の食堂で聖書と出会いました。高ぶりもわがままもみんな罪、ということを知り、「それでは私には罪がある。どうすればいいのですか？」と伝導していた隣人に尋ねました。そこで初めて、イエス様が私の罪の身代わりとなって十字架にかかってくださり、罪を赦し、罪を忘れてくださることを知りました。イエス様は、清く正しい人のためではなく、こんなわがままな私のために来てくださったのだ！それは本当に驚きでした。悔い改めて祈ると平安な気持ちになることも体験しました。冒頭のみことばを読むと、心の真ん中がぽっと暖まって、イエス様の優しさを感じます。

黒澤　環（吉祥寺）

● ● ● ● ●

あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。　（マタイ　18・19）

交通事故による頸椎損傷で妻が寝たきりになったとき、平安と希望を与えてくださったみことばです。私ひとりではなく、多くの方が祈ってくださっている、その祈りに主が耳を傾けてくださらないはずがない。治療の結果は、どんな障害が遺るとしても最善のものに違いない、と確信しました。妻は8時間の大手術後、奇跡的な回復（執刀医の話）をしました。みことばの力と主のご真実に感謝し、祈りの友が与えられていることのありがたさを、しみじみ感じました。

清水洋一（吉祥寺）

● ● ● ● ●

わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。　（マタイ　28・20）

家内が天に召されてから3年半になりまが、不思議なほどに悲しみ寂しさがありません。残された私は今、一人で台所で洗い物をしたり、お米を研いだりしていますが、そうした小さな行為に至る日常生活のすべてに平安が与えられています。主がいつも共にいてくださる、とはこういうことかな、と思わされ、イエス様を信じ救われていて本当に良かった、と感謝する日々です。　池田伝一（吉祥寺）

● ● ● ● ●

「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」　（ルカ　5・8）

「絶えず祈れ」（キリスト集会発行）に写真が載っている金田福一著の聖書日課を読んでいました。救われているはずのキリスト者、毎週説教をしている伝道者が突然、漁師ペテロのように、自分を罪深い人間と悟ることについて書いています。その箇所を目にした時、上記の聖句が浮かんできて、私こそ、その告白をしなければならないのに、と自分の罪意識のあいまいさ、希薄さを思わされて、泣きました。特定の罪というよりも私の存在自体の罪です。私に欠けていたことを聖書が示してくださった、と思いました。　佐々木 明（吉祥寺）

● ● ● ● ●

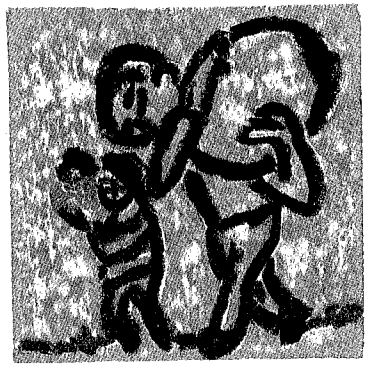
自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。　（ルカ　17・33）

このみことばは私にとって理解しがたいものでした。いのちを失うとはどういうことなのか…。失って戻ってこなかったら、と思うと怖くて、とりあえず、自分のものは自分で守ろうと、しっかり縄をかけました。少しでもそれを失いそうになると、ますます頑丈に縄をかけ、ついにがんじがらめになって、何をするにも不自由で息がつまりそうでした。ふと見ると、目の前に野原が広がり、主にある兄弟姉妹が楽しそうに語り合っています。私もそちらに行きたいと思いましたが、幾重にも縄がかかり、身動きがとれません。自分を捨てるしかありませんでした。みことばが私の中に働いてくださったのです。いのちを失うとは、自分を愛さなくなることでした。その結果、私は自由と解放、主の豊かさを味わうことができるようになったのでした。

藤原はるみ（吉祥寺）

● ● ● ● ●

まことに、あなたがたに告げます。子どもの



すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい
（マタイ　11・28）

ように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。
（ルカ　18·17）

息子が7～8歳の頃のことです。学校の遠足を楽しみにして、その日が晴れるようにと、イエス様に祈っていました。ところが当日は朝から雨。私は朝食の準備をしながら、「祈りは聞かれなかったじゃないか。神様はいないよ」と言われたら何と答えようか、と思案していました。起きてきた息子は「あっ、雨だ！お母さん、もう一人のクリスチャンが、どうしても雨が降りますようにって祈ってたんだね。イエス様は両方の祈りを聞いて、僕の遠足はやり直しができるから、もう一人の祈りを先に聞いたんだよね」と言ったのです。この時、上記のみことばが胸に突き刺さり、言いつくろうとした自分を恥ずかしく思いました。素直に信じていた息子は社会人となり、一人歩きを始めましたが、信仰心だけは幼子のままであって欲しい、と願いつつ祈る日々です。　辻田美智子（吉祥寺）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

14年前、初めて集った家庭集会でイエス様を信じ、悔い改めの祈りをしました。自分でも驚き、喜びと共に戸惑いも覚えました。何をどうすればよいか分らず、キリスト集会の男性の方に質問した際にいただいたのがこのみことばです。子どものように素直に「どうしたらよいか教えてください」とイエス様に祈るよう勧められ、よく分らないままそのとおり祈りました。翌朝、食前のお祈りをと言われ、気の重さを感じた時、同じテーブルの2歳の子が、目を閉じて手を合せました。前日のみことばそのものを目の当りにした驚きと共に、その自然で素直な姿に「そうか、こうすればよいのか。」と思わされました。つたない祈りに答えていただいた最初の経験であると同時に、イエス様に向き合う際の原点となった、忘れ得ないみことばです。
佐山孝治（吉祥寺）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。　（ヨハネ　3·16）

母が胆のうがんで入院したとき、娘の晶子と見舞いに行き、このみことばに母の名（深谷ミサ）などを書き添えた、次のような文章のカードを渡しました。神（唯一の創造主）は、実に、そのひとり子（救い主イエス・キリスト）をお与えになったほどに、世（深谷ミサ）を愛された。それは御子（イエス様）を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。すると、母はそれを読みながらポロポロ泣き出したのです。「お祈りする？」と聞くと「うん」とうなづいてベッドの上に正座して手を組みました。そして、私が祈る後について祈りました。このみことば一つで母は救われました。この日から母は早く天国へ行きたいと願うようになり、1997年7月7日にイエス様と父の待つ天に召されました。　松見とみえ（吉祥寺）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

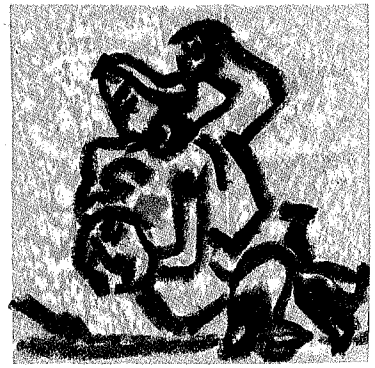
またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」　（ヨハネ　9·1～3）

イエス様に出会う数年前、私は真に生きる目標を見出したいと、宗教とは知らずにヨガという偶像崇拝に身を置いていました。「病はあなたや親族の罪のゆえ」と聞かされていました。そういう中、信仰を持つ友人の祈りによってイエス様に一方的に導かれ、救われました。そして、キリスト集会の方に勧められてヨガから離れはしたものの、何故そうする必要があるのかわからなかった私に、主はこのみことばをくださいました。人を責め、要求し、傷ついている人にさらに重荷を負わせる宗教に比べて、主のみことばのなんと慰めと愛とに満ち、希望に溢れていることか、目を見張る思いでした。後になって、自分が悪霊の支配している恐ろしい世界にいたことを知り、急いで助け出してくださった主の憐れみを心から感謝しました。
松田由紀子（吉祥寺）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。
（ヨハネ　10·10、11）

6年前の寒い日、妻から「ドイツ人のベックさんという方が、友人の紹介で家に来てくれます。一緒に相談しましょう」と言われました。私は「そんな人に相談しても、わが家の問題は解決しない。俺は遠慮する」と答えました。当時、わが家は冷たい風が吹き荒れ、万事がうまくいかないことに「どうしてだ。自分に何の落ち度もないのに」と妻や子につぶやいてばかりいました。しぶしぶ顔を出した私に、ベックさんは、上のみことばを引用して「動物の中で羊だけは、牧者がいなければ生きてゆけない」と話してくださいました。「あの話の羊は自分のことだ」と、と今も鮮明によみがえってきます。その牧者を受け入れることができた私は、かつての「真暗闇の中」から「光の中」に導かれています。
工藤　敏（大分）



愚か者は自分の怒りをすぐ現わす
（箴言 12·16）

●●●●●

わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。……だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。　（ヨハネ　14・21、23）

このみことばは私の心の目を大きく開いてくれました。私はそれまで何を愛していたのでしょうか。いったい、「愛する」とはどういうことなのでしょうか。私はそれまでこのような問題を正面から考えたことは一度としてなく、ただ自分のうちに潜む盲目的な自己愛と欲望の奴隷でした。このみことばは、その驚愕すべき事実に気づかせたのです。「お前はわたしを愛するか」とここでイエス様は私自身に向けて問うています。そして「愛する」とはどういうことかをも明確に語っています。主を愛するとは「主のみことば、みこころを大切にすること」だと。主はご自身を愛する者と共に住み、その者にご自身を現されると。これらは、信仰とは主を愛することだと悟らせ、私を罪の暗闇から光の中に導き出してくれたみことばです。

蘇畑卓郎（吉祥寺）

●●●●●

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。　（ヨハネ　15・4）

自分を正しいとする態度が、周りの人を苦しめ、自分を窮屈にしていることを日々の生活で目の当たりにし絶望いたしました。
疲れるばかりで、そこには全く実りがありませんでした。しかしそれと知りながらも、やめられないのです。こんな無力でみじめな私の中に主がとどまっていてくださることを、このみことばで示されて、希望と元気がわき出てきました。愛そのものであられるイエス様が、汚く冷たい私の心に住み、生きて支配してくださるというのです。十字架のみわざは私のためだった、と改めて感謝致しました。　藤田信子
（吉祥寺、3月末までオクラホマ在住）

●●●●●

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。　（ヨハネ　15・12）

ずっと愛されていないと感じていました。主イエス様を知らなかったときのことです。人間の真実は孤独なのだ、それゆえさまようのだ、と思っていました。僕の世代、この思いは常識のように周りの人々にもよく見られ、重い心の傷となっていました。でも、主イエス様は、御恵みによって僕の心の傷を癒してくださいました。23歳の春のうららな日に主イエス様と出会いました。その時、心に響いたのが、このみことばです。真理は愛でした。主イエス様の十字架の愛によらなければ、だれの心も満たされません。嗚呼（ああ）僕は知りました、神様の愛を。傷つけ合う無邪気さは毒のように愚か。愛を、愛を与え合うのが真実。心傷つく人々が皆救われますように。アーメン。　山田健介（川越）

●●●●●

「主です。」　（ヨハネ　21・7）

毎日のように思い浮かべる力強いみことばです。生活の中で悔やむべきことがあったとき、古い自分はそれを後悔するばかりでしたが、新しい自分はその背後に主の働きを見るようになりました。それは今日現在も続いています。そしてその主の働きの目的は専ら、関連する人々の祝福を祈るためであり、自分は徹底して砕かれ、へりくだるためでした。　松見敬三（吉祥寺）

●●●●●

「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」
（ヨハネ　21・22）

イエス様の憐れみと恵みにより1961年に救われ、今に至っていますが、その歩みの過程で、大きな節目ごとに冒頭のみことばが必ずのように示されました。大洗の地から吉祥寺へ導き出された時、定年退職して即、御代田へ移された時などです。二者択一を迫られた私は、この断固としたみことばの杖に身をゆだねて歩むしかありませんでした。結果は「神、その道は完全。」（詩篇　18・30）の一言につきました。厳しく思えるみことばの背後に立ちたもう主の最善のお導きとみ恵みの深さを、今日も長野の素晴らしい自然に抱かれながら賛美せずにはいられません。　納富信子（御代田）

●●●●●

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。　（ローマ　8・28）

結婚のため故郷の滋賀から出て、主人の勤務地である足利に住居が与えられたのは1970年4月でした。だだっ広い関東平野に放たれた、右も左もわからぬ迷子の羊のようでしたが、イエス様に頼っての新生活でした。半年後、京都から古山牧師が飢え渇いた私たちを訪ね励ましてくださり、与えられたのがこのみことばです。みことばに対する目が開かれ、みことばに信頼する喜びが与えられました。主がこの小さな者たちをあわれんでくださっているこ



雲の中に一挙に引き上げられ
（Ⅰテサロニケ4・17）

とを深く知らされ、心に大きなともしびがともされました。その時から、このみことばがわが家の土台となり隠れた宝となり希望となりました。主を愛さず自分を愛するしかない者を、今もあわれみ万事を益としてくださる主に、ただただ感謝します。　吉田和子（春日部）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

3年半前、主人が事故で重傷を負ったときに与えられたみことばです。当時、医師からは、歩けるまでに回復するかどうかわからない、と言われましたが、イエス様がいてくださるから大丈夫という思いが与えられ、平安でした。主人の方も、許せなかった人たちのことを主に示され、悔い改めに導かれました。また、入院中にたくさんの人に福音を伝えることができ、なかには救われた人もいます。みことばのとおり、主はすべてのことを働かせて益としてくださいました。主人はいま、普通に歩けるようになりました。　ツァオ陽子（ザルツブルグ在住）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

このみことばに初めて触れたのは18年前、神戸キリスト集会の集いに出たときでした。この世の中では、本音と建て前の使い分け、うそや裏切りなどで自分自身を守るのは当たり前、失望させない人などいない、と思っていました。しかし、このみことばの「彼」がおられるなら会ってみたい、と思いました。その方はおられました。主イエス様です。その後、腰痛（変形性脊椎症）による失職、高血圧や前立腺肥大のための薬の服用など、さまざまな試練に会いましたが、イエス様に信頼してゆだねるとき、いつも平安が与えられ、失望させられたことがありません。
加藤正光（芦屋）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。　（ローマ　11・36）

阪神淡路大震災の時に、与えられたみことばです。その2年ほど前から、私たち夫婦は主によって立て直していただく必要がありました。大地震が起きたのは、ドイツよろこびの集いに初めて参加して、夫婦で新しく歩み始めた時でした。地震の瞬間、これは主人の罪のために下された罰だ、と思ったのですが、それが全くの思い違いであることを、このみことばで教えられました。すべては神が起こされていることで、個人的な事柄によるのではなく、問題はむしろ個人的なものと受け取る私の側にありました。私のうちに隠されている罪を明るみに出してくださいました。このみことばは、今もなお思い違いをする私を、光の下に出してくださいます。
森島久仁子（芦屋）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。　（1コリント　2・9）

1969年に主の救いに預かりました。それから21年後に、このみことばが礼拝をささげているとき、鮮明に私に臨んできました。それまでの私の信仰は自分の力で信仰の確信を得ようとするものでした。だから、それを得ようと、必死の努力をしていました。しかし、それらはすべて木っ端微塵に吹き飛ばされてしまいました。自分の内側には何もない、「（私の咎は）髪の毛よりも多く、私の心も私を見捨て」（詩篇40・12）、救いは主イエス様が一方的にくださるものであることがわかりました。信仰の支点は私にあるのでなく主イエス様にあったのです。礼拝中、心の底から湧きあがってくる喜びにずっと打ち震えていました。　吉田　浩（春日部）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。　（1コリント　10・13）

初めてキリスト集会に導かれた頃、自分の悩みは決して解決しないと思い苦しんでいました。生きていく上で予期しないことが起こったり、仕事の上で困難に陥ったりすると不安になり、つい神様につぶやいてしまいます。しかし、そのような体験を通して、主がすべてをご支配なさっていることを知らせていただいています。主に心を向けて歩み始めるとき、そこに備えがなされていることを、このみことばからも知らされます。　古田公人（吉祥寺）

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

「光が、やみの中から輝き出でよ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。　（2コリント　4・6、7）

46歳で胃癌になりました。市の健診で要検査の通知を受け、内視鏡検査で胃を全部取る



「わたしについて来なさい。
あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」
（マタイ　4・19）

手術が必要だと告げられたのです。先生方はだれもガンとは言いませんでしたが、自分はガンであると分かりました。その時、このみことばに出会い、不思議な平安を与えられました。土の器に過ぎない私の中に、この宝（神の力）が入ってくださっている、というのです。私は、このみことばにすっぽり包まれているように感じて、思い煩うことなく夜もぐっすり眠ることができました。　鈴木博美（春日部）

●●●●●

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。　（2コリント　9・8）

このみことばは12年前の9月、初めての「ドイツよろこびの集い」でいただいたものです。当時の私は新しい歩みを始めるようにと導かれ、罪を離れた矢先でした。そのような私にいきなりこのみことばです。「神は…できる方です」このみことばは、私にとって、創世記19章に出てくる御使いたちの腕そのものとなりました。その腕は、ロトと彼の家族の手をつかんで滅びの町ソドムからつれ出しました。良いわざが何一つできていない私にくださったイエス様のプレゼントです。この経験を通してみことばの権威はあらゆるものより偉大であることを知り、感謝と安心を得ることができました。

森島左武郎（芦屋）

●●●●●

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。

（2コリント　12・9）

若くして親元を離れ、就職のために上京した私は、苦労してそれまで育ててくれた両親に対して、感謝するよりも反発を感じるような者でした。長い間、父と疎遠になっていたのも、それが一因だったと思います。このみことばは1年前、ためらう私の背中を押し、父を訪ねる勇気を与えてくださった聖句です。「わたしの力は弱さのうちに働く」のみことばに、「弱いまま、みじめなままでいなさい。わたしが働くから」と思わされ、重い足を前に踏み出すことができたのです。久しぶりに実家の敷居をまたいだ私は、すなおに長年の親不孝を詫びることができ、父も温かく迎えてくれました。みことばに信頼した私のうちに、主が働いてくださった、と思いました。主は私のすべてをご存知で、私の悔い改めを待っていてくださいました。

そして、いつでも主にお頼りすればよい、という安心を与えてくださいました。

和田ヒロ子（吉祥寺）

●●●●●

柔道で鍛えた体力をもってサラリーマン社会に飛び込みました。気力と体力があれば何でもできると仕事に打ち込み、努力が認められることに生き甲斐を感じていました。管理職として韓国に赴任したときも、民間大使として存分に活動しようと高ぶっていました。しかし、反日運動やストライキの連続の中で不眠の日が続き、極度のうつ状態となり、死ぬことばかり考える日々でした。初めて「神様、助けてください！」と叫びました。任期を残して帰国。失意の中でキリスト集会に導かれ、必要な相談相手も備えられて、聖書の真理に目を開かれました。そして、このみことばに出会ったとき、肩の力がフッと取れたことを覚えています。今は病気の身で、苦しくなることもありますが、それでも喜ぶことができるのは感謝です。イエス様早くおいでください。

須田貞夫（吉祥寺）

●●●●●

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ　2・20）

かつては自分の努力や善意が役立ち、それで何事もうまくやっていけると思っていましたが、対人関係の問題を通してその自信が崩されたばかりか、自分のうちからは自己防衛の、自己中心の思いしか出てこないことを思い知らされました。そして、自分には主の働きを妨げることしかできない、それをどうすることもできない、と悩んでいたとき、上記のみことばで「自分がイエス様とともに十字架につけられたこと、主の十字架のみわざにあずかっていること」に気づかされました。主が私のうちに生きて働いてくださる恵みを痛感しました。　藤田　匡

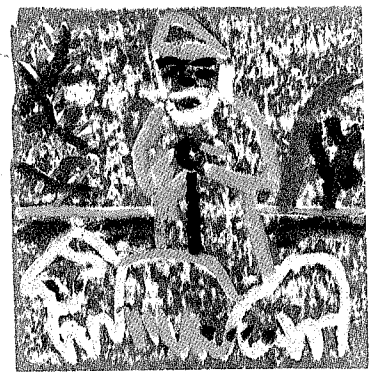
（吉祥寺、3月末までオクラホマ在住）

●●●●●

あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。　（エペソ　2・5）

私は12歳のときイエス様を信じ救われましたが、11年後に信仰を捨てて自分の欲望に任せた生活を始めました。幸いにも、虚しかった日々は約2年後に終り、悔い改めてキリスト者の生活を再スタートしました。しかし、自責の念にさいなまれ、一度拒否した自分は主イエス様に愛される資格がないのではないか、という恐れを抱いていました。そして、ある礼拝中、この恐れに支配されて絶望した時、主はすかさず、このみことばを与えてくださったのです。恐れは一切なくなりました。以来、イエス様の限りない恵みと愛のなかで希望を持って生活しています。

加藤育穂（吉祥寺）



わたしは、良い牧者です。
良い牧者は羊のためにいのちを捨てます
（ヨハネ 10・11）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。
（ピリピ　4･6）

昨年12月2日、自分が受け持っている土木作業現場で死亡事故が起きました。「もっと仕事をこなせていたら、もっと気を配ることができていたら、事故を防げたのではないか」と自分を責めました。そして「どうか事故から守ってください。作業員を殺してしまうくらいなら仕事を取り上げてください」と祈りました。そんな時、母を通していただいたのが、このみことばです。「思い煩わなくてよいのだ。願い事を神様に知っていただけるんだ」という思いが私を支えてくれました。毎日、何回もくり返して読みました。そして、事故のことを「ごめんなさい」とイエス様に謝り、罪の重荷が軽くなったと感じました。　宇高一郎（芦屋）

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。
（ピリピ　4･19）

このみことばと出会ったのは、夫の会社が倒産して、仕事ばかりか家までも失ったときでした。それまでは、ただ読み過ごしていた聖書の箇所でしたが、八方ふさがりの困窮の中で「必要をすべて満たしてくださる」というみことばが目に焼きついたのです。「そうなんだ。主がすべてを満たしてくださるのだ」という思いが与えられて、目の前がパッと明るくなりました。それまでの思い煩いがいっぺんに消え去り、平安につつまれました。そして、ほどなく住まいが与えられ、夫の仕事も見つかって、みことばの約束を実現される主のご真実を体験しました。神である主は、微々細々に至るまで面倒を見てくだいました。　荒井弘恵（吉祥寺）

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
（1テサロニケ　4･17）

イエス様の救いを受け入れてからの生活も、以前のように労苦はあります。しかし、このみことばを目にする時、どんな労苦の中にあっても、希望と平安が与えられます。主イエスが再び来られ、空中でお会いすることになるとは、なんという素晴らしい約束でしょうか。待ち遠しい限りです。主よ、早く来て下さい。
石黒郁彦（吉祥寺）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
（1テサロニケ　5･16～18）

7年前脳こうそくで左手足が不自由になったとき、妻はそれを最初はなかなか受け入れられなかったようでした。しかし、「すべての事について」のみことばに示されて、この試練も主が与えられたのだと感謝できるようになりました。私の方も、介護の疲れで喜びがなくなってしまう時に、妻の「ありがとう」の一言で喜びが戻ってきます。そして、私は「いつも喜んで」介護できるようにありたい、妻は介護される「すべての事について感謝」できるようにありたいと、それぞれの願いを胸に、共にイエス様に「絶えず祈る」ようになりました。国川憲三（吉祥寺）

神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りとによって、聖められるからです。
（1テモテ　4･4､5）

キリスト集会に集い始めて数カ月経った頃、自分（肉）の思いでは良いものであっても、御霊に導かれた事でなければ神様に喜ばれない、と知らされました。すると、良いと判断して行なった事が偽善の行為のように思えてきたのです。何をするにも「これは御霊に導かれているものなのか、肉の思いからくる偽善なのか」という疑問にとらわれ、身動きがとれなくなりました。ある夜、悶々としながら「神様どうしたらいいのでしょうか」と生まれて初めて真剣に祈りました。その翌朝、与えられたのが上記のみことばです。「どんな事でも、感謝して受け取れば思い煩う必要はないのだよ」という主のお答えでした。私は晴れ晴れとした気持になりました。主の救いを確信した瞬間でした。
山下彰（御代田）

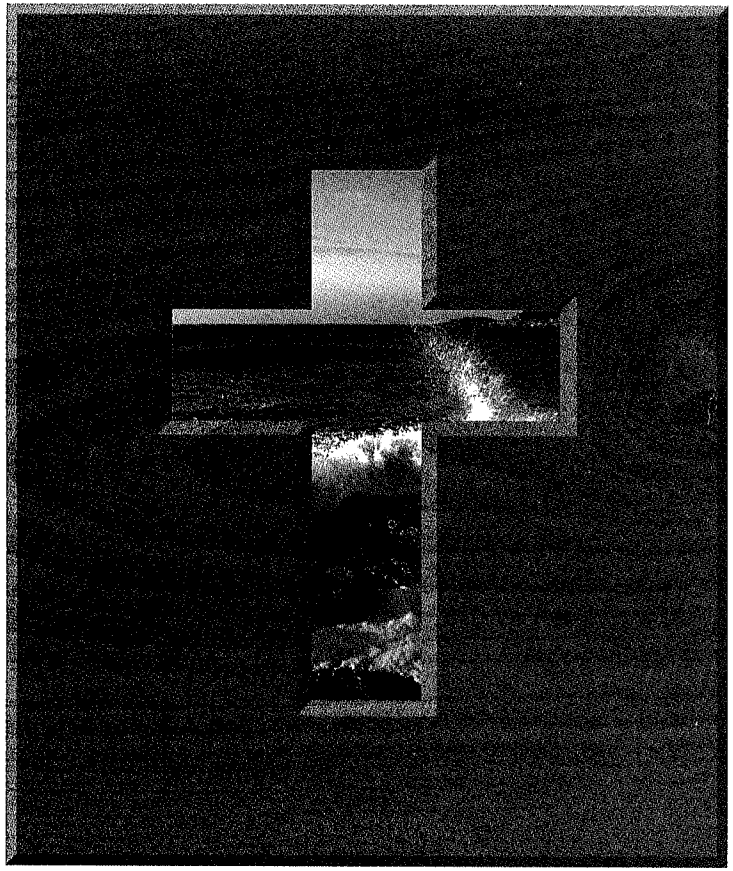
いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」
（ヘブル　13･5）

一人暮らしの私は、いろいろな心配や不安がありました。特に病気や、老いて動けなくなった時の生活環境などのことを考えると、いつも暗い気持ちになっていました。しかし、ある時、このみことばに出会い、「私は今、私を愛し、私のすべてに責任を負ってくださる、全能の主を持っている」ことに気づかされました。その後、いつの間にか、あれほどたくさんあった心配や不安はなくなっていました。　森下待子（岡山）

絵：谷口幸三郎（春日部）



みことばのすべてはまことです
（詩篇 119･160）



新しいいのちに生きる

神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。
（創世記　1・27）

1.免疫不全症と造血幹細胞移植

私は小児科医をしていますが、小児科にはいくつか専門領域があり、私の専門は小児の血液・免疫・腫瘍（しゅよう）分野です。そのうちでも最近数年間は先天性免疫不全症というまれな病気を対象として仕事をしています。まれと言っても、この病気には多くの種類があり、中でも重症複合型免疫不全症というタイプは、生まれつきごくわずかな遺伝子のキズがあるために免疫（細菌やウイルス等の外敵から身を守る力）がほとんどなく、治療を行わなければほとんどの人は1歳くらいまでに感染症で死亡します。そして、根治する唯一の手段が、骨髄移植や臍帯血移植を含めた造血幹細胞移植です。

移植を成功させるためにはいくつかのステップが必要です。はじめに1週間くらいかけて、大量の抗癌剤や放射線で患者さんの骨髄（血液を造る工場）をゼロの状態にします。これを前処置と呼んでいます。次に幹細胞と呼ばれる血液を造る元になる細胞を点滴で入れると、順調にいけば2週間ほどで幹細胞が自然に骨髄に根づいて、新しい血液を造れるようになります。免疫不全症のような生まれつき遺伝子にキズのある患者さんの血液細胞は、前処置によって根絶され、新しくキズのない正常な免疫の力を持った血液細胞が根づくのです。これによって病気は完全に治り、以後はほぼ通常の生活を送れるようになります。

幹細胞移植では、血液以外の体の細胞（皮膚や髪の毛や内臓など）は元の本人の細胞のままです。血液の細胞だけが新しい他人の細胞に入れ替わるのです。免疫を司るのは血液の細胞だけなので、血液細胞さえ正常な機能を持つものに入れ替われば、先天性免疫不全症は治ります。

このように造血幹細胞移植はとても魅力的な治療法です。しかし、移植には多くの合併症があります。新しい血液細胞が根づくまでの約2週間は、一時的に感染症に対して無防備となりますので、患者さんは無菌室



の中で過ごさなければなりません。前処置で使う大量の抗癌剤の副作用のために、多くの方々が激しい吐き気、ひどい口内炎や下痢などに悩まされます。髪は一時的にすべて抜け、皮膚や肝臓にもしばしば障害が出て、発疹や黄疸（おうだん）が出ます。ひどいと全身の皮膚がむけてしまい、激しい痛みを伴います。口内炎もひどくなると自分の唾液すら飲み込めず、声を出すこともできなくなります。こうした辛い日々を過ごした後に、新しい血液細胞が生き生きと働くようになります。それまでは、じっと我慢するしかないのです。

これらの合併症は必ずしも全員に一様に起きるわけではないのですが、どうしてもある程度は起きてしまいます。私たち移植医は、これらの合併症を極力少なくして、しかも新しい血液細胞がそっくり入れ替わることを目標としています。前処置が弱いと、残っている本人の細胞が新しい他人の細胞を拒絶してしまいますし、前処置が強すぎても、合併症が多くなってしまいます。小さな子どもたちが声も出せず、泣くことすらできずにじっと耐えているのを見るのは本当に辛いものです。また、私たちに与えられているいのちとは、実にもろく、そして大切なものであるということを日々感じさせられます。

2.第1のいのち

聖書は、2つのいのちについて書いています。すなわち、アダムによって与えられた第1のいのち、イエス・キリストによって与えられた第2のいのちの2つです。

第1のいのちはアダムを通して与えられたいのちです。

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」……神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。（創世記　1・26、27）

そしてこの初めの人アダムは、蛇にそそのかされて善悪の知識の木の実を食べ、それによって人には死がもたらされた、と書かれています。

神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」（創世記　3・22）

これが第1のいのちであり、罪人としてのいのち、また有限のいのちです。どうしてアダムによるいのちは罪人としてのいのちなのでしょうか。聖書は私たちが罪人であると繰り返し述べています。悪いことをした時には、そのとおりだと思うかもしれません。しかしそうでもない時は、私たちは自分が罪人であるという自覚をほとんど持つことはありません。

しかし聖書は一貫して私たち人間を罪人と呼びます。そして重要なのは、私たちが罪を犯すから罪人であるとは述べていないことです。聖書は、私たちが罪人であるから罪を犯すのだ、と言っているのです。つまり私たちはアダムという罪人によって生まれたので、生まれながらにして罪人である、ということです。

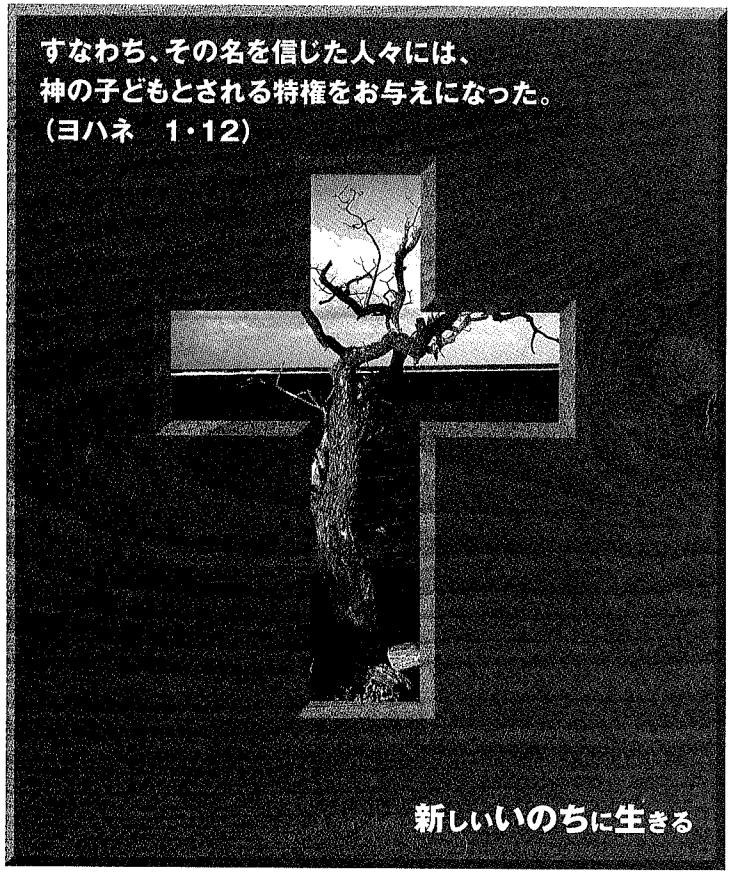
そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。（ローマ　5・12）

アダムから先祖代々伝わっている性質、いわば遺伝的な性質によって、私たちは、一見良さそうに見える人も悪そうに見える人も、等しく罪人であるというのです。この事実はどうしたら変えることができるでしょうか。

3.第2のいのち

解決の道はただひとつ、一度死ぬ、ということです。私たちは生まれた時から罪の性

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）



質を持っており、これは自分の努力で変えられるようなものではないのですから、存在そのものを断つしか方法はないのです。遺伝性の病気は免役不全症などの一部の病気を除いて、基本的に治るということはないのです。対症療法で一時的に病状を安定させることはできますが、根本的な治療法は存在しません。同じように私たちの罪人としての性質は、罪を犯す元がなくならない限り、治るということはありません。死こそ、唯一の罪からの解放の道であると聖書は言っているのです。では、私たちはどうしたら死ぬことができるでしょうか。それは自分の努力でできるものではありません。私たちはどんなに努力しても自分の力で良い人間になることは決してできません。なぜなら私たちの内にはアダム以来脈々と引き継がれた罪人としての性質がつねに変わることなく存在するからです。

これは遺伝性の病気のようなもので、どんなに頑張っても一時的に症状が軽くなることはあるかもしれませんが、治ることはないのです。免疫不全症の子どもたちも、抗生剤などで一時的に症状を軽くすることはできますが、移植という根治療法を受けない限り必ず死に至るのです。聖書は次のように言っています。

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。（ローマ　3・20）

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。（ローマ　6・4）

では、私たちはどうやってキリストの死にあずかるバプテスマを受けることができるのでしょうか。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

私たちはキリスト・イエスとともに十字架につけられて、すでに死んでいるのです。それは今起きたことではなく、2000年以上前に起きた事実です。

主イエス・キリストは十字架の死の後、復活されました。その復活にあずかり、キリストの内にある私たちも新しく生まれたのです。これが第2のいのちです。

あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。（コロサイ　2・12、13）

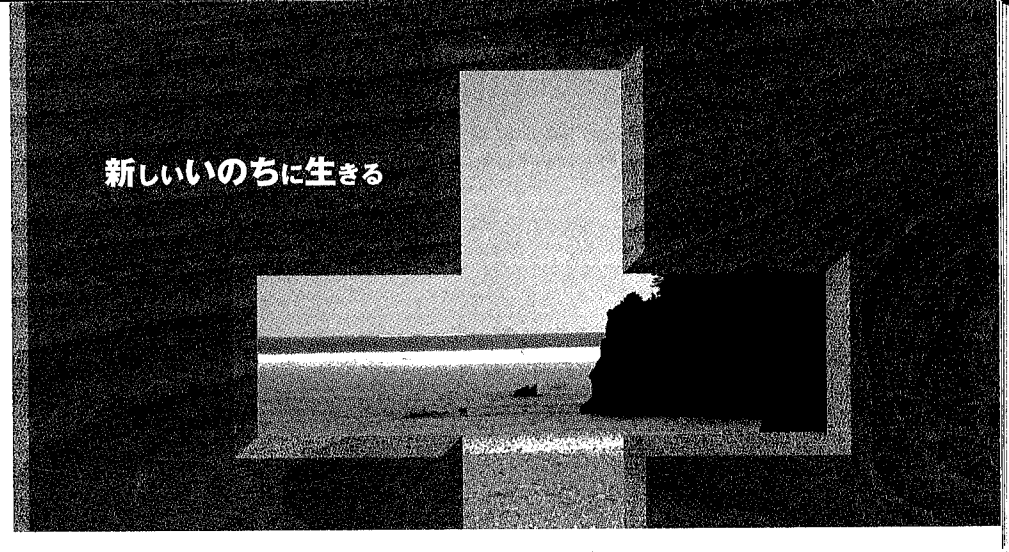
しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。（１コリント　15・20～22）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（２コリント5・17）

これこそが新しいいのちであり、このいのちは永遠に絶えることはありません。では、私たちはどうしたらこの新しいいのちを受けることができるのでしょうか。

わたし（イエス）のことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。（ヨハネ　5・24）

神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。（1テサロニケ　4・3）



事実、わたしの父のみこころは、子（イエス）を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。
（ヨハネ　6・40）

主イエスを信じ、受け入れさえすれば新しいいのちは与えられるのです。何か良い行いをしなければ救われない、ということはありません。そもそも罪人が良いことをできるわけがない、と神様は判断され、このような救いの道を提供してくださったのです。ただありのままの姿で神様の前にごめんなさい、そしてありがとう、と言いさえすれば罪は赦され、それればかりか罪を犯す元（罪人）そのものも葬られ、新しいいのちが与えられる、と聖書は言っています。イエス様は私たちの古い罪人としてのいのちを処理するために身代わりとして十字架で大きな痛み、苦しみ、孤独を体験されました。

新しいいのちが私たちの内に根づくためには古いいのちを処理する必要があります。移植で新しい幹細胞が根づくために前処置で古い血液細胞を根絶する必要があるのと同じです。前処置は辛く苦しいものですが、私たちは前処置を受けずに古いいのちを処理していただき、新しいいのちを受けることができるのです。この前処置の大きな苦痛、罪の処理という最も辛い部分をイエス様が担ってくださったからです。次のみことばに、私たちはただ神の前にひれ伏し、礼拝せざるを得ないのではないでしょうか。

彼（イエス）はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ　53・3〜5）

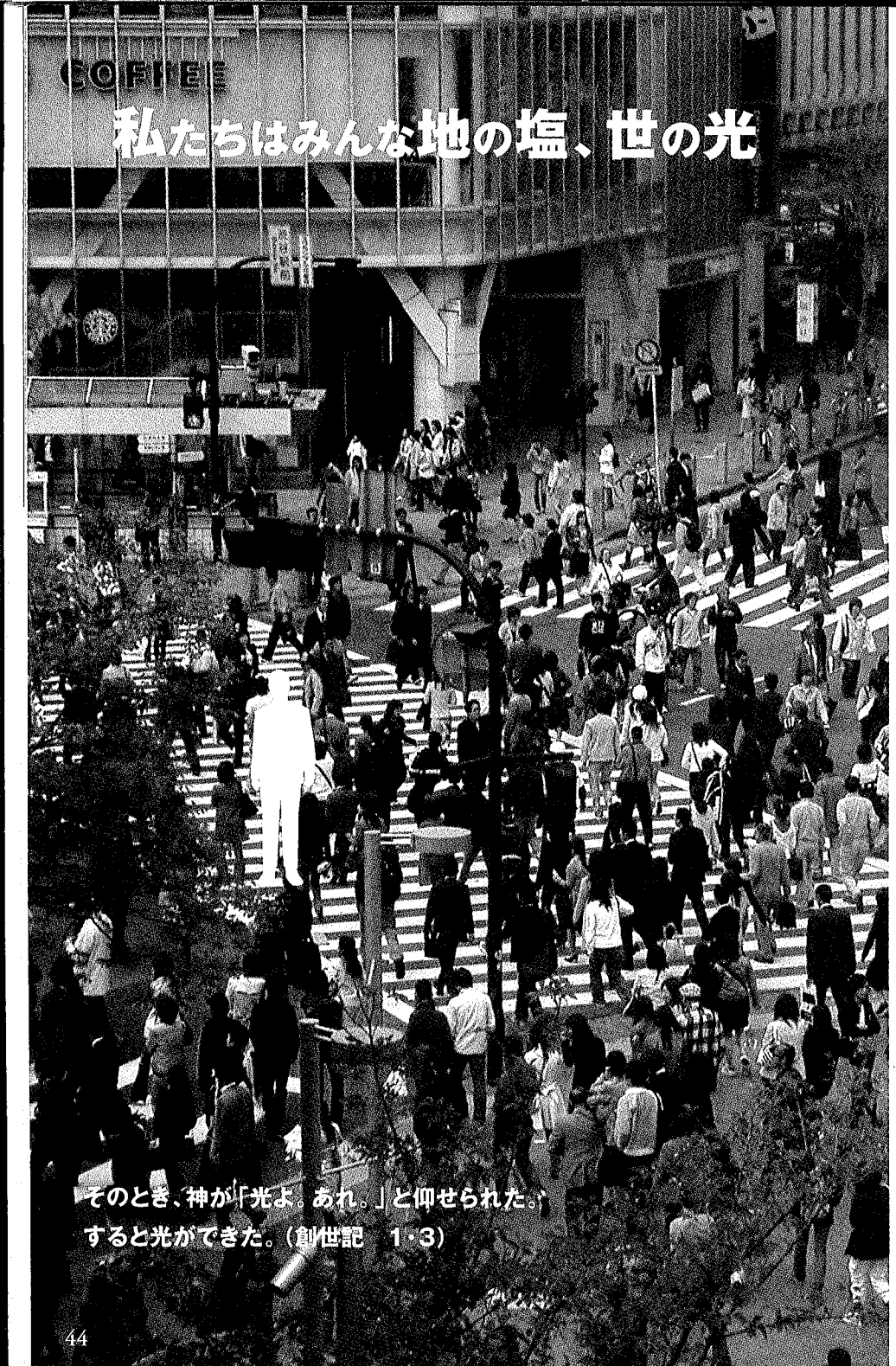
肉体という器はキズのついた古い器のままですが、霊（いのち）が入れ替わるのです。移植において血液以外の体の細胞は元のままであるのと同様です。新しくキズのない、しかも永遠に続くいのちだけが、キズのある、限りある土の器の中に移植されたのです。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。
（2コリント　4・7）

私たちはごめんなさい、ありがとうございます、と言うだけで、つまり悔い改めと感謝さえあれば救いを得、十字架によってアダムの内からイエス・キリストの内に変えられるのです。私たちは何もしていません。すべては神様の側から提供されており、私たちはそれをただで、受け入れたいと思えば受けることができるのです。これこそが福音です。この事実をいつもかみしめつつ、新しいいのちによって歩み始め、また歩み続けることができれば幸いです。なぜなら、新しいいのちこそが本当のいのちであり、これによって生きる時にはもはや罪を犯すことがなく、そしてこのいのちは永遠に続くからです。

辻陽一郎
1964年神奈川県生まれ。八坂小、東京学芸大附属中、同附属高、東京医科歯科大医学部卒。防衛医科大学校小児科医師（小児の血液、免疫、腫瘍専門）。
家族は妻／純、
長女／真理恵、
次女／百合香、
長男／光一、
3女／愛結実。





私たちはみんな地の塩、世の光

そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。（創世記　1・3）

キリスト集会では、聖日ごとの礼拝と福音集会が国内だけでも50数箇所で開かれています。その内、私がメッセージのために伺ったのは15箇所ほどに過ぎませんが、そこではいろいろな方との交流の機会が与えられました。集っている方のご家族や友人との出会い、その中には試練に会っておられる方もあります。入院中の方のお見舞いにも行きました。そして、各地のキリスト集会では、多くの方々が、聖書にある「地の塩」「世の光」としての役割を日々送っておられることに感銘を受けました。そのような働きの一端に、私も加えていただくことができ、どこに伺ってもいつも「行ってよかった」と恵みに感謝しながら帰路につくことができました。

あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょう。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを枡の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。（マタイ　5・13～16）

先日宮崎に行った時、難病の筋ジストロフィーで都城の病院に入院されている是枝さんの所に、小林集会の方々とお見舞いに行きました。是枝さんは呼吸のための処置をされていて話すことができません。こちらからの話しかけにうなずくのが精一杯です。何を話していいか一瞬戸惑いましたが、自分の知恵ではなくイエス様が語らせてくださいました。失礼する時、三人でお祈りをしました。（是枝さんはその後、2006年4月8日に天に召されました。）また昨年のことですが徳島に伺った折、同じ病気で17年も入院されている絵を描かれる浜田さんの入院先に、徳島集会の東さんと見舞ったことを思い出しました。私が知っているのは、ほんの限られた方々ですが、その方々が各地でイエス様の福音を伝え、また、試練のさ中にある多くの方々に主の愛を伝え、力づけておられます。

私たちの信仰の仲間が全国各地で「地の塩」「世の光」として主に使われておられることを、私の少ない体験からもうかがい知ることができました。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。（マタイ　25・40）

イエス様は「あなたがたは、地の塩です。」とおっしゃいました。「あなたがたは、世界の光です。」とも言っておられます。このみことばは、イエス様が地上におられた頃、当時の人々に語られただけではなく、今の私たちへの語りかけでもあります。イエス様に「あなた





がたは、世界の光です。」と言われると、私などはとてもそのような者ではありませんと言いたくなります。しかし、「あなたもそのような者になりなさい。」とおっしゃる主のみこころが心に強く響いてきます。

私たちは日が暮れれば明りをつけます。聖書が書かれた時代は油は高価で、明りをともすことはお金のかかることだったと思います。明りをともすことのできる人は、お金持ちだったのではないでしょうか。油を買えない人たちは、暗くなったら寝ていたのかも知れません。

現代の私たちには、暗くなったら寝る生活と聞くと、「ああ、いいな。うらやましいな」とさえ思えるのですが、暗い夜に明りをともせなかった人たちは、恐ろしい夜の闇の中で、光にあふれる朝を心から待ち望んだことでしょう。私たちは光のありがた味に鈍感になっていると思います。

また、当時の人は、よほど特別な人でなければ字が読めなかったでしょうし、私たちが使っている印刷された聖書など存在せず、羊皮紙に手で書き写した聖書しかありませんでした。普通の人は誰かに読んでもらうしか、みことばに触れる機会はありませんでした。現代の私たちには、整った聖書があり、何時でも開くことができるので、その頃の人々よりかえってみことばを深く心に受け止めることが少なくなっているのではないでしょうか。

そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。(創世記　1・3)

この「光」という言葉を、当時の人々がはじめて耳にした時、私たちよりはるかに深い感動と喜びを覚えたことでしょう。

私たちは自分で光ることはできません。イエス様の光をいただくことによって、たとい小さなささやかな光であっても光る者に変えられるのです。この地上の歩みを終えるその日まで、いつも優しく暖かい信仰の光を放つ者であり続けたいと思います。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。(エペソ　5・8～10)

一方、「塩」という言葉は聖書の中で「光」ほど沢山は出てきません。そして「あなたがたは、地の塩です。」というみことばは「あなたがたは、世界の光です。」に比べると、はてなと首をひねらされます。

塩は塩のままでは固体です。水に溶かせば水の中に広がりますが、目に見えなくってしまいます。肉や魚のようにメインデイッシュとして、塩がお皿に山盛りになって出てくることなどありません。光に比べると地味で目立たない存在です。塩は大昔から調味料や保存のための防腐剤として欠かせないものでした。私たちは体内に塩分がなくなれば生きて行けません。聖書が書かれた時代の人々は、生命に欠かせない塩を、おそらく死海周辺で手に入れていたと思われます。また旧約の民数記18章19節には、主が人間に与えられた「永遠の塩の契約」という言葉を見ることができます。

イエス様は次のように言っておられます。

**塩は、ききめのあるものです。しかし、もし塩に塩けがなくなったら、何によって塩けを取り戻せましょう。あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに和合して暮らしなさい。
(マルコ　9・50)**

パウロは次のように言いました。

あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。(コロサイ　4・6)

私たちは、ただ主のあわれみによって救いの群れに加えていただきました。でも私たちは、信仰の歩みを続けるために必要な塩、信仰の成長に必要な塩を保ち続けているでしょうか。

私たちに必要な信仰の塩は、いったいどこから求めることができるでしょうか。信仰の塩は私たちが自分の力で作ることはできません。

私たちの信仰の塩は、聖書を読み、みこころを真剣に尋ね求めることでしか得られません。イエス様の限りないご愛に触れ、聖書を読んで、真剣に祈り、みこころを尋ね求めて、聖霊の助けをいただいていれば、自然に塩を持つことができます。それによって、自分の力ではできないことも、聖霊に導かれてできるようになります。イエス様に喜ばれる、朽ちることのない健全な信仰の塩を保つことができるようになります。

私たちは、二千年前に、イエス様が私たちの罪を一身に背負って十字架の上で血を流されたことによって、完全に、百パーセント、罪を赦され、解放され、救われています。つまり私たちは、完全に救われた存在であり、「救いの確信」を与えられています。ですから私たちは、このイエス様の驚くべき救いの事実を、確信を、感謝を、多くの罪の原理が支配するこの世の中にあって、常に証しし続けていかなければなりません。そのために主が私たちに与えてくださるのが、信仰者だけが持つ「主の光」であり、信仰者だけが持つ「主の塩け」です。もちろん、私たちは、大した働きができない者ばかりですが、主がこのような「主の光」と「主の塩け」を与えてくださるから、このひどい世の中でほんの少しでも主のご栄光を伝える者として使われるのです。「主の光」も、「主の塩け」も、すべては主から与えられ、主を信じる者、主に従う者、主の子どもとされた者だけが放つ、主ご自身の光、特性、現われです。

「あなたがたは、地の塩です。」について、もう少し考えてみましょう。主は、信仰が地上に生き生きと働いて、もっともっと大勢の人々が救いにあずかるために、あなたがたはこの地上でご用に役立つ塩になりなさいと言っておられます。私たちは、これから信仰に導かれる方々の中で、いつも神の恵みを証しする役目を担っています。この心構えと実行こそイエス様に喜ばれる「地の塩」なのだと思います。

この塩の役目と働きについて、二十歳で天国に召されたベックさんのお嬢さんのリンデが、すばらしい学びをしているので、ご紹介しましょう。

「キリスト者は、常に、料理に塩が用いられるように、地の塩として、周囲の者に影響を及ぼす使命を持っています。塩である、というのは大切なことです。その使命を満たしたいと思う者は、溶けてなくならなければなりません。すなわち、自己否定なしには、私たちは主の証人とはなりえません。」（「実を結ぶ命」110ページより）

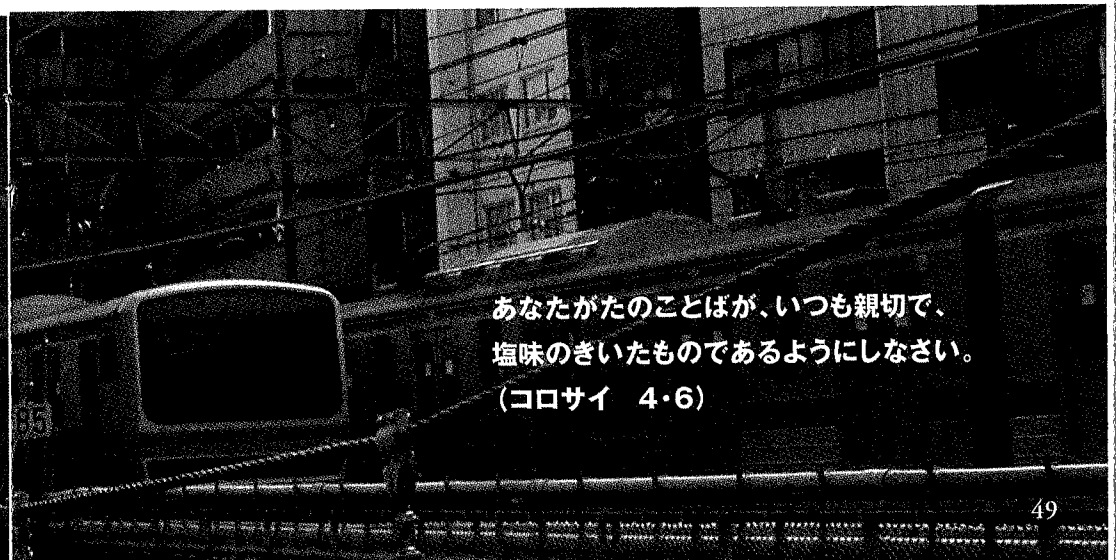
これこそが、地の塩としての私たちの究極の姿ではないでしょうか。

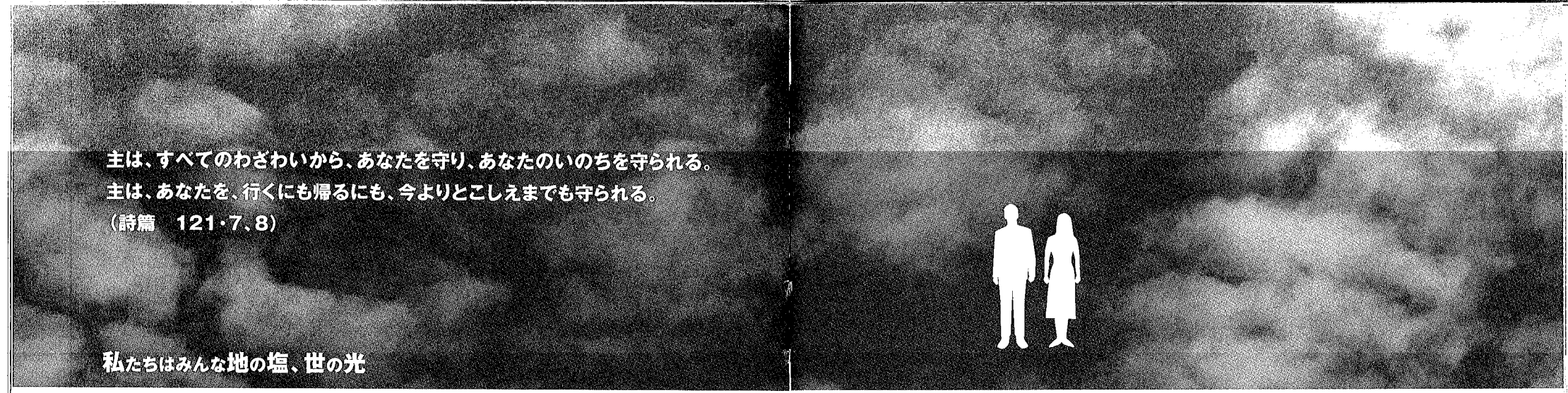
人々に福音を伝える場合、私たちは、よく、効果的な説得をするためにどうすればよいかということに頭を使いますが、主が「地の塩であれ」と言われることの意味は、そのような一見塩味のきいたような上手な語り口を指しているのではありません。

私たちにただできることは、お伝えする相手の方の心の痛みに降りていき、折にかなった適切な主のみことばをお届けすることだけです。そして、この主のみことばこそが、私たちの伝道の至らない言葉の中に「主の塩味」となって働き、主ご自身が相手の方を信仰へと導かれるのです。みことばがすべてであり、私たちは人間的な配慮をしすぎて、主のみこころを損なうことのないように気をつけなければなりません。

次にピリピ人への手紙から少し見てみましょう。







主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。
（詩篇　121・7、8）

私たちはみんな地の塩、世の光

こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。（ピリピ　2・1〜5）

ここでパウロとテモテは、なにごとも自分中心ではなく、へりくだる者、仕える者となり、最も低い者になりなさいと勧めています。
ともすればこの世の現実に心を奪われ、私たちはイエス様を忘れ、自分の欲望を満たすものに気を取られがちです。折角いただいた信仰が、わたしたちの内側で眠らないようにと導いてくださる聖霊の働きは、イエス様の愛そのものです。イエス様の愛の内にいる私たちはみな、信仰の家族の兄弟であり姉妹です。みことばにあるように、私たちの内に、励まし、慰め、御霊の交わり、愛とあわれみがあふれるなら、信仰の家族の間にいつも新鮮な喜びが満ちあふれてきます。その時信仰の家族である私たち一人一人は、主の光を反映して、主が人々の足元を照らされる証し人として用いられるのです。

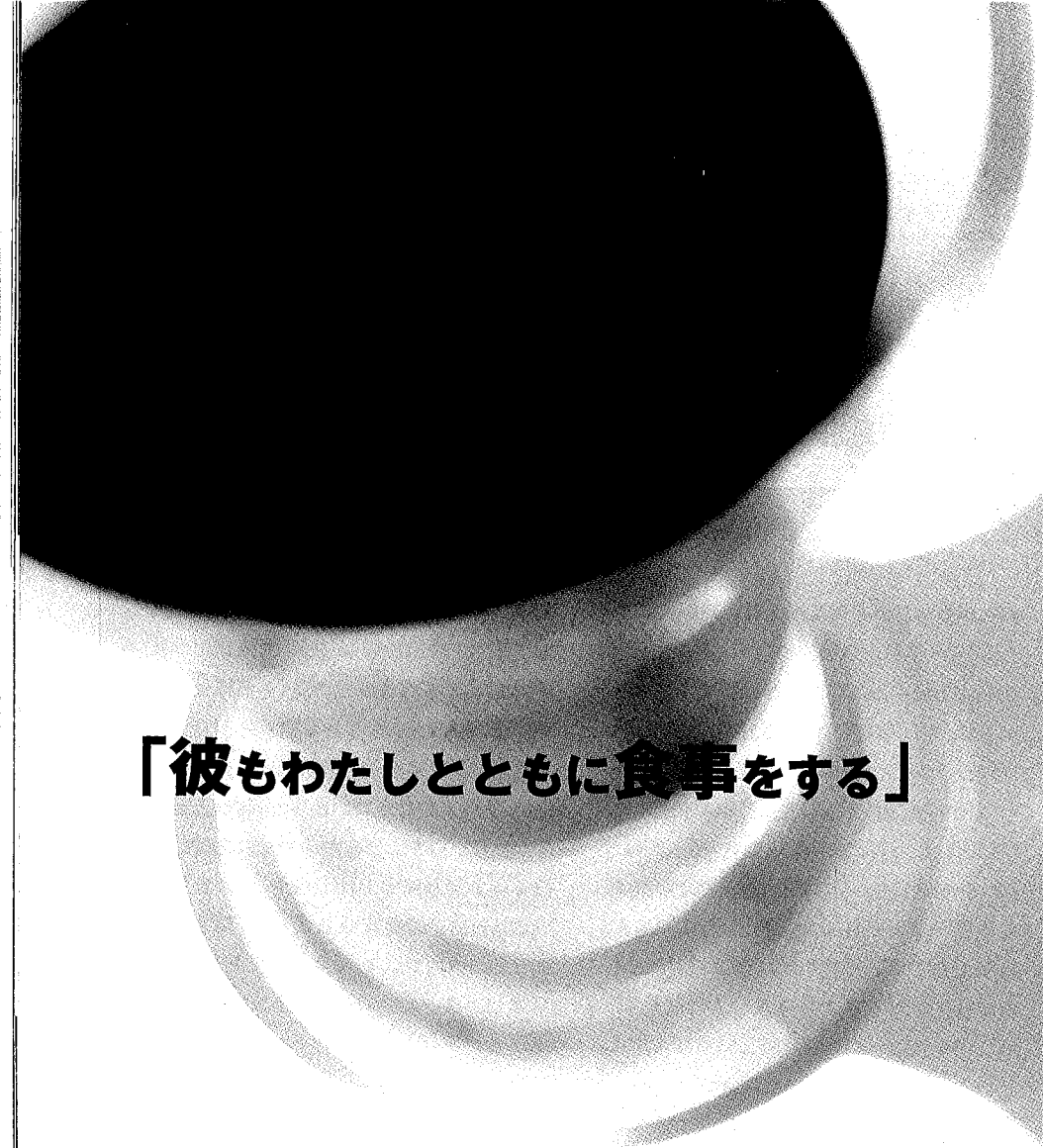
あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。（１ペテロ　1・5〜7）

私たちはイエス様からはっきりと「あなたがたは、地の塩です。」と言われました。私は、自分の信仰さえふらついてばかりいる頼りない者ですし、ましてしょっちゅう塩気のない、役にたたない者になっています。それでも、このような者にさえ、イエス様は「あなたがたは、地の塩です。」とおっしゃるのです。この塩を、塩気のなくなるままにしておくのは申しわけのないことです。私たち一人一人は弱く、信仰がぐらつきかねない者です。いつも聖書に親しんで聖霊の助けをいただきながら、みこころに耳を傾けて、地の塩であり続けたい、と思います。また信仰の家族である多くの兄弟姉妹の間でも、お互いに励ましあい支えあって、命じられたご用である主の恵みを証しする役目をさせていただきながら歩み続けたいと思います。そうすれば、こんな私でも主の塩として、また、明るく暖かい信仰の光をともす者となることができるでしょう。これからも、まだイエス様をご存知ない方に、各地の信仰の家族の兄弟姉妹と共に「地の塩」「世の光」として、ささやかながらイエス様をお伝えして行きたいと思っています。

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。（詩篇　121・7、8）

菊池有恒
1935大連生まれ。戦後父の郷里岩手に引き揚げる、花巻北高校、東北大学法学部卒。小松製作所入社、人事部長、関連会社社長。退社後、25坪の家庭菜園で野菜づくり。





「彼もわたしとともに食事をする」

「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。」（マルコ　2・16）

「あの方は罪人のところに行って客となられた。」（ルカ　19・7）

罪人のところに

イエス様はこの地上におられたとき、いろいろな人たちとともに食事をされました。

収税所にすわっていたアルパヨの子レビは、「わたしについて来なさい。（マルコ　2・14）」とイエス様から声をかけられ、すぐに立って従いました。そして、イエス様が彼の家の食卓に着かれたとき、彼の友人たちをはじめ、取税人や罪人たちも大ぜい、いっしょに食卓に着いていました。こういう人たちが大ぜいいて、イエス様に従っていたと、聖書に書かれています。その日のレビの家での食卓は人々があふれ、とてもにぎやかなものとなりました。

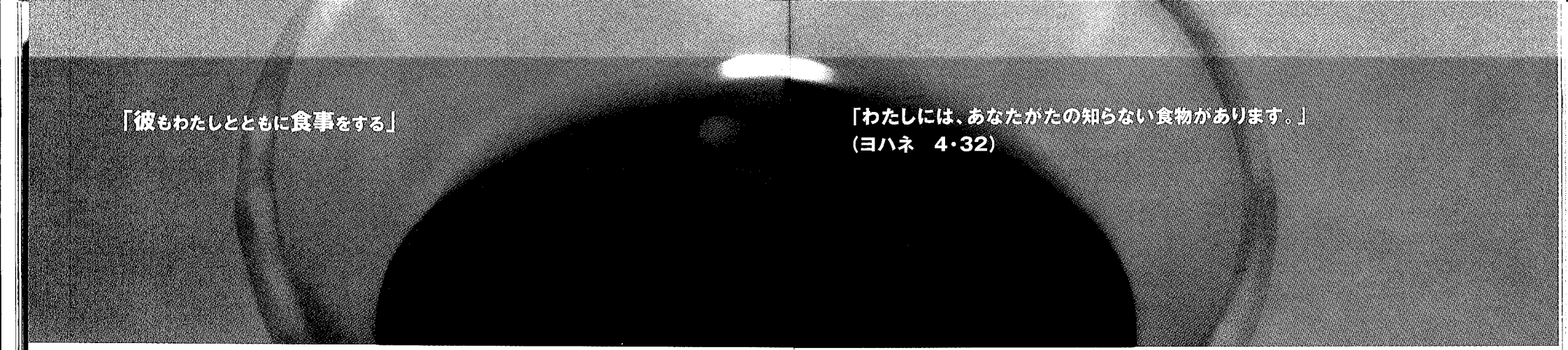
「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。」（マルコ 2・16）

レビの家の食卓の様子を見たパリサイ派の律法学者たちが弟子たちに言ったことばです。

当時のユダヤ人の社会では、ユダヤ人以外の人々や、律法から遠いとみなされていた人たちとは、挨拶や、ことばをかわすのも良くないとされていました。ですから、イエス様が取税人や罪人たちとともに食事をするなどということは、律法学者たちにとっては不思議で考えられないことでした。けれども、「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか」という、彼らの疑問の言葉そのものが、そのまま、イエス様がこの世に来られた目的だったのです。

イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ　2・17）

同じ食卓に着くことは、とても親しい間柄を意味します。罪人を招いて、ともに食事をすること、このことがイエス様の私たちへの「招き」であり、「福音」です。イエス様はこの地上に来られ、時が満ちたとき、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。（マタイ　4・17）」と言われ、近づいた天の御国とその福



「彼もわたしとともに食事をする」

「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」
（ヨハネ　4・32）

音を宣べ伝えられました。ですから神の御子であるイエス様は、近づいた天の御国で、いつまでもイエス様とともにいる人々を捜して招くためにこの地上に来られたのです。

いっぱいになるように

イエス様はある時、いっしょに食卓に着いていた客のひとりが、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう」と言った言葉を受けて、ひとつのたとえ話をされました。

「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。宴会の時刻になったのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。』と言わせた。ところが、みな同じように断わり始めた。最初の人はこう言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』もうひとりはこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人や、不具の人や、盲人や、足なえをここに連れて来なさい。』しもべは言った。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです。』」
（ルカ　14・16〜24）

盛大な宴会の席に、あらかじめ招かれていた大ぜいの人たちは、それぞれ日々の生活のいろいろなことに一生懸命で、招待された席には少しも関心がありませんでした。全員が断ったことを知った主人はたいへん怒り、しもべに急いで町へ出て行って無理にでも人々を連れて来るように命じました。

多くの人々でこの家がいっぱいになること、そして多くの人々がともに主人の用意した食事を味わうこと、このことが盛大な宴会を催した主人の切なる願いでした。

みな、食べて満腹した

「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままで帰らせたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」（マタイ　15・32）

イエス様と弟子たちはいっしょにいた五千人以上の人々とともに食事をされました。

その時の食事は、寂しい場所での、草の上の食事でしたが、多くの人々がともにすわり、イエス様といっしょに、五つのパンと二匹の魚をともに食べ、ともに全員が満腹したという、すばらしい夕食となりました。弟子たちが用意した五つのパンと二匹の魚は、五千人にはまったく足りませんでしたが、イエス様は、「それを、ここに持って来なさい。（マタイ　14・18）」と言われ、手に取って祝福して裂かれ、それを弟子たちが配り、みながそれを食べ、みなが満腹し、さらに余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあったとあります。イエス様の祝福に満ちた豊かな食事会となりました。

わたしの食物

そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください。」とお願いした。

しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」

そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」
（ヨハネ　4・31〜34）

イエス様がご自分の食物について語られたところです。

イエス様は旅の疲れで、サマリヤのヤコブの井戸のかたわらに腰をおろして、弟子たち



イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」（ヨハネ　4・26）

「[illegible]わたしとともに[illegible]をする」

が町から食物を買って来るのを待っておられました。

イエスは「わたしに水を飲ませてください。」と言われた。（ヨハネ　4・7）

ひとりのサマリヤの女の人が井戸に水を汲みに来ました。ヤコブの井戸を前に、イエス様と女の人だけがいました。疲れていたイエス様は、その女の人に水を求めて話しかけました。この女の人もイエス様が捜す、失われていた人でした。

イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」（ヨハネ　4・26）

女の人はイエス様との会話を通してイエス様ご自身と出会いました。イエス様が与えてくださる、その人のうちで泉となり、決して渇くことがない永遠のいのちへの水をいただきました。そしてこのことが、弟子たちの知らないイエス様の食物でした。

何か食べ物がありますか

イエス様は復活された後にも、この地上で弟子たちとともに食事をされました。

イエスは、「ここに何か食べ物がありますか。」と言われた。それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。（ルカ　24・41～43）

弟子たちがエルサレムでひとつに集まっていたとき、復活されたイエス様は、彼らの真ん中に立たれました。驚き恐れる弟子たちに、イエス様はご自身をはっきりと現わして、「ここに何か食べ物がありますか。」と弟子たちに尋ねられました。夕食がすでに終わっていたのか、その残りであったのかもしれませんが、弟子たちのところには焼いた魚の一切れがありました。そしてその一切れを、訪れたイエス様に差し上げると、イエス様はそれを弟子たちの前で取って召し上がってくださったとあります。

シモン・ペテロが彼らに言った。「私は漁に行く。」彼らは言った。「私たちもいっしょに行きましょう。」彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。（ヨハネ　21・3～6）

夜通し働いたのでしょうが、その夜は何もとれず、舟の上の弟子たちには朝になっても一匹もとれず、食べ物がありませんでした。岸べに立たれたイエス様は、ここでは「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」と言って弟子たちに近づかれ、ご自身を現わされました。「はい。ありません」と弟子たちは素直に答え、イエス様が言われた通りの方向に網をおろしました。結果は大漁でした。

弟子たちが陸地に上がったとき、彼らはイエス様がすでに用意してくださっていた、炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見ました。イエス様は、「あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。（ヨハネ21・10）」と言われました。そしてそこには平安がありました。

イエスは彼らに言われた。「さあ来て、朝の食事をしなさい。」弟子たちは主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか。」とあえて尋ねる者はいなかった。イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。（ヨハネ　21・12、13）

「わたしに水をのませてください。」「ここに何か食べ物がありますか。」「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」…とイエス様は言われ、その人のところを訪れてご自身を現わしてくださいます。この世は、「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか」と訴えますが、イエス様は、「さあ来て、食事をしなさい」と言われます。イエ

「彼もわたしとともに食事をする」

ス様は今日もイエス様とともに食事をする人々を求めておられます。それは、ともに食事をすることは、その人とともに席に着くという最高に親しいことのひとつのあかしだからです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」
(黙示　3・20、21)

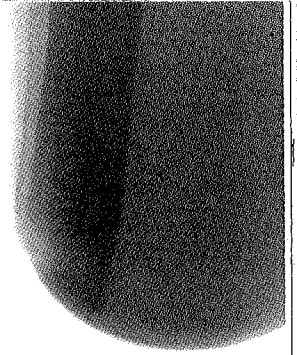
新しく飲むその日までは

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」(マタイ　26・26〜28)

イエス様はご自分が十字架の苦しみを受けられる前の夜、弟子たちとともにする最後の食事である晩餐の場を設けられました。主と弟子たちとのこの地上での最後の過越の食事です。ここで食されたのは、イエス様のからだであるパンと、罪を赦すために多くの人のために流されるイエス様の契約の血である杯でした。そしてイエス様は、「わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。(マタイ26・29)」と言われ、賛美の歌を歌ってから、オリーブ山へ出かけて行かれました。

その後イエス様は、ゴルゴダの丘の上でひとりの罪人として十字架に架けられました。サマリヤの女の人に、決して渇くことのないいのちへの水を与えられたイエス様は、「わたしは渇く。(ヨハネ19・28)」と十字架上で言われました。罪を知らない神の御子であるイエス様はすべての人の罪をその身に負われ、父なる神様の前に、ご自身を一つの永遠のいけにえとしてささげられました。

**私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。
(詩篇　116・13)**



これを行ないなさい

二千年前のイエス様の十字架の時以来、この地上には、イエス様の救いを受け入れた人たちが集う、ひとつの晩餐があります。それは週の初めに行なわれる聖餐式です。

**すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。
(1コリント　11・23〜26)**

まもなくイエス様は来られます。イエス様を待ち望む人々は、イエス様が来られるそのときまで、この地上で、ともにひとつに集まり、ともにイエス様のからだであるひとつのパンと、イエス様の流された血による新しい契約のひとつの杯にあずかります。そして、そのたびにイエス様の十字架の救いのみわざを覚え、その良き知らせを世に告げ知らせるのです。

**あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。
(ヘブル　12・22)**

私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。(詩篇　116・13)



石塚　稔成
埼玉県立川越高校勤務。三鷹高、東京理科大学理学部卒、同理学専攻科修了。

私の叫びを聞かれたイエス様

柿沼 義一

ある朝、娘の「お腹が痛い…」という声で起こされた私は、その苦しそうな症状に不安がよぎりました。――このときが、イエス様が私に働きかけてくださった「救いのご計画」の始まりだったのですが、それを知ったのは後のことです。

私たちは、すぐ娘を近くの病院に連れて行きました。そのまま入院することになった娘は病状が悪化して、担当医から「原因が不明で的確な治療ができません。末期がんの可能性があり、このままでは助からない」と告げられました。思いもよらない可愛い子どもの死の宣告に、家内と嘆き悲しみ、頭が混乱しました。何かにすがらなくては居ても立ってもいられず、「苦しいときの神頼み」そのままに、神に願いました。

話はさかのぼりますが、私は父の母方の墓が仙台にあるため、子どもの頃から父に連れられて毎年8月、東京から墓参に行っていました。そして、その神社の社務所に泊めていただくのが楽しみでした。裏手の森の小鳥の鳴き声で目覚める素晴らしい朝、荘厳、静寂、自然の樹木や社殿に響く玉砂利の音…。そんな環境に清々しい爽やかな気分になり、いつしか神社は、心のオアシスになっていました。でも、そこにまつられている神については無関心で、参拝は形だけのものでした。

ですから、この心のオアシスは、直面する娘の問題、永遠の別れになるのではないか、という深い悲しみと恐れには、全く無力でした。そして、暗やみの中で苦しみうめいていたとき、突然一筋の光のように「イエス様」を思い出したのです。「イエス様」のことは、娘や家内からも少しは聞いていましたが、自分には関係ないと思っていました。ただ、ひとつだけびっくりした経験はあります。信仰には無縁な人間と思っていた義弟の田中順治さんが、いつの間にかイエス様に救われて、生まれ変わったようになったことです。そのイエス様が今度は私の前に現れてくださったのです。「イエス様、助けてください。天国での再会でもいいです。死んでからでも娘に会わせてください。」私はうめくように叫んでいました。

この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。
(詩篇 107・13)

眠れぬ夜が明けて病院に行くと、緊急手術を知らされました。予定患者が急にキャンセルになり、娘は手術室に入っていきました。今生の別れになるかもしれない娘を見送るとき「イエス様、助けてください」と心の中で叫びました。姉と田中さん夫妻が駆けつけて祈ってくださいました。

数時間後、娘はいのちあるものとして戻り、喜びの涙でイエス様に感謝しました。娘は入院中、キリスト集会の方々のお見舞いを受け、退院後にそれまで通っていた教会を離れ、吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。娘は、死に直面したときの恐怖を通して、聖書の知識と救いとの違いをはっきり認識したようです。それで、かつては拒んでいたキリスト集会へ移る決心をしたことを後日、話してくれました。

まもなく家内と娘が、ベックさんが聖書の話をされる家庭集会に初めて参加しました。自宅から30分ほどのお宅でしたが、私が迎えに行く約束をしていましたので、時間を見計らって訪ねると、多くの方々に迎え入れられて、ベックさんに挨拶することになりました。ベックさんは易しくイエス様のお話をしてくださり、その後で「祈りませんか」と言われました。私はベックさんの後について、初めて声を出して祈りました。



妻の晃子さんと。

その年の夏、軽井沢のバイブルキャンプに参加していた娘から「洗礼を受けてもいい?」という電話がありました。私はすぐ了承して、立ち会うことを約束しました。

翌日、旧軽井沢のキャンプ施設に着き、ベックさんにお会いすると、「明日、家族3人で受洗するといいよ」と言われたので、飛び上がるほど驚きました。うろたえながら「聖書を読んでいません」と言う私に、「救いに知識は関係ないよ」とベックさん。まさに晴天の霹靂でした。両親や上の娘に何も話していないので困惑しました。

その晩は、集会の方の別荘に泊めていただき、信仰について話し合いました。その席で私は、保守的な地域に住み、先祖の墓のこともあって、洗礼は受けられない、と必死に抵抗しました。しかし勝負はすぐつきました。イエス様の救いを確信して歩んでいる方々に太刀打ちできず、「わかりました」と、洗礼を表面上承諾しました。しかし、「洗礼を受けても、二度と集会には来ない」と決めていました。私の心の状態では、信仰生活はとても無理と思ったからです。

今思い返すと、なぜその時、家内や娘と

相談しなかったのか、いかに自己中心で愛のない者であったか、そしてウソの承諾をしてイエス様の御前で平気で罪を犯したことを反省させられます。

翌朝は、私の心のように雲は低く垂れ込め、霧雨が降っていました。キャンプの会場に着くと、4人が洗礼を受けるとのことでした。私たち3人ともう一人の女性です。集会の方々は、うれしそうに準備してくださっていました。ところが前日の洗礼者が多かったため、洗礼着が3着しか残っておらず、今回の洗礼は避けられたかと内心期待しました。が、それも束の間、シーツを洗濯ばさみで摘まんだものを着ればいい、ということで準備は整ってしまいました。

いよいよ洗礼式が始まりました。賛美の歌は、初めて聞く曲でしたが、心の中にしみ入るようでした。不思議にその場所が輝いているように感じられ、受洗に際して読まれたみことばも、祈りも、静かに心に入ってきました。続いて家内と娘が受洗し、着替えてホールに出ると、突然、体験したことのない心の奥底からの静かな喜びが、涙とともにあふれてきました。霧雨が樹木をベールのように美しく囲み、見るものが一変していました。そして感謝の気持ちでいっぱいになり、これから始まるイエス様に従う信仰生活に希望がわいてきました。

私は、この時、救われたことを実感しましたが、主のみたまも同時に与えられたことを確信しています。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。

(ローマ 10・13、14)

私たちは、聖書の福音、喜びの知らせを聞いたことによってイエス様を知ることができ、イエス様に叫ぶことができました。

あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。

(エペソ 1・16)

また、イエス様に救われた背後には、長年にわたるキリスト集会の皆様の祈りがあったことを思い、感謝でいっぱいです。2006年2月、娘夫婦が滞在する米国オクラホマの地で「よろこびの集い」が開かれましたが、その集いでも、主イエス様の大きな祝福をいただき、主を崇め、賛美せずにいられませんでした。イエス様の計り知れない愛を思うとき、私たちにはひとかけらの愛もないことを示されますが、イエス様は、同じ信仰を持つ多くの方々を通して、今も生きて働かれ、私たちに勇気を与え続けてくださっています。

上の娘は、まだイエス様と出会っていませんが、家族の救いはイエス様の約束です。そのご栄光の日を待ち望んで、祈り続けています。

1941年東京都麻布生まれ。1964年武蔵工業大学電気通信科卒。自営業。妻 晃子さん、長女 栄子さん、次女 藤田信子さん。

語り尽くせない主の御計らい

柿沼 晃子

私がイエス様に出会ったのは、次女信子のことを通してでした。キリスト教系の学校に12年間通いましたので、聖書の話は聞いていましたが、心を向けることはありませんでした。それよりも、家の中で刺繍などの手芸に熱中している女の子でした。

結婚生活は、環境の全く違う商店に嫁いだため、慣れない仕事に戸惑いと無力を感じる不安の毎日でした。義母はお店が大事で、厳しい人でもありましたので、なかなか優しく接することができず、そのことでも平安がありませんでした。そんな時期、会社を経営していた父が亡くなりました。そして、閉じた会社の後始末を手伝うことで、主人は留守がちになり、義父、義母との関係がますます悪くなりました。当時の私は自分のことばかり考え、主人の苦労、大変さを思いやることができませんでした。

教会に行ってみたいと思い、二人の娘と通いました。しかし、店が忙しいこともあって、ほどなく離れてしまいました。救いのことも良くわかりませんでした。

このような生活の中で、私は子どもの教育にはとても熱心でした。その熱心さは、特に信子には辛かったようです。もうとっくにギブアップしているのに気づかず、頑張ることを強いていました。そんな私を打ちのめしたのは、信子の病気でした。信子が突然の腹部の激痛で緊急入院し、「命の保障はありません」と聞かされたのです。私は目の前が真っ暗になりました。追い打ちをかけるように「原因はストレスではないか」の言葉。自分のしてきたことの愚かさを痛切に感じて「ごめんなさい」と主イエス様に祈るばかりでした。

しかし翌日、悲しみは喜びに変りました。輸血などの手当てで娘は奇跡的に助かったのです。死の淵から戻ってきた娘の姿に、主のご栄光を見る思いでした。

しばらくして、妹の田中節子とご主人の

順治さんがキリスト集会の方々と一緒に見舞いに来てくださいました。見舞いの人たちが帰った後、大きな虹が出ているのが窓から見えました。

後で知ったのですが、集会の多くの人が、私たち家族のために祈ってくださっていました。信子の回復は、主イエス様のあわれみ、としか考えられませんでした。併せて、自分の罪深さに目を向けることができました。教育に熱心と言いながら、心の内側には、自分をよく見られたいという自己中心の願望がありました。その傲慢さに気づかされて、悔い改めることができたのです。イエス様はこんな私のために、十字架で血を流してくださったということ、そして罪を告白するときに清めてくださることを知って、感謝でいっぱいになりました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1・9)

その年の夏、信子の洗礼に立ち会うため、主人と軽井沢のバイブル・キャンプに行きました。ベックさんに挨拶しますと、「3人で洗礼を受けたらどう? 恵みですよ」と言われて驚きました。主人は一瞬、ためらったようでしたが、私は素直にお受けしました。そして、主イエス様が「主人の救いの時」を備えてくださったのだ、と確信しました。

洗礼式を終えた私たちは大きな喜びに包まれ、「辛かったこと、悲しかったことは、今日のため、イエス様を知るためであったのだ」と納得することができました。この時から、主人と私の新しい生活が始まりました。主のご計画は完全でした。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。 (エレミヤ 29・11)

主のご計画、恵みは、それだけにとどまりませんでした。第一に挙げられるのは母の「死の時」です。「あと7年」と言われた時期を過ぎて入院していた母は、私たちの救いを待っていたように、受洗の後に亡くなりました。このため聖書に基づく葬儀を行なうことができ、お出でくださった多くの方々にイエス様を紹介することができました。

キリスト集会の葬儀では、故人の死を悲しむことよりも、天国の希望や、死が終わりでないことが語られます。義父は「こんな葬儀は初めてだよ。私の葬儀も同じにしてもらいたい」と言いました。そして、ほどなく救われて、自宅の風呂場で洗礼を受けました。第二の恵みです。

第三は、義母も続いて救われたことです。義母は、紙に書きとめたベックさんの「祈りの言葉」を毎日読んで祈っていました。

この義父と義母に対しては、以前は「世話をしている」という思い上がった気持を



2006年2月米国オクラホマで開かれた「よろこびの集い」で。後列、左から2、3人目、柿沼夫妻。

抱いていましたが、その誤りに気づかされたことも、イエス様の導きでした。

さらに、9年前からは東京・麻布の自宅で家庭集会が開かれるようになりました。月に1度、聖書のメッセージを聞き、親しく語り合う時を持っていますが、イエス様を求める新しい方々が来られた時など、本当にうれしくなります。

2004年からは、毎週水曜日午後7時に若者の祈り会が拙宅で開かれるようになりました。若い人たちの信仰の姿は、私たちを元気づけてくれるようで、これも恵みだと感謝しています。

わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。(詩篇 40・5)

今は主人と二人で店に出ています。どこまでも傲慢で、自分の思いを捨てることのできない者ですが、主イエス様を第一にして歩んで行きたい、と願っています。毎日、主人とともに聖書を読み、ともに祈る時を持てる、ということも大きな恵みです。自分の弱さみじめさを、正直に告白して祈る時、イエス様はいつも平安を与えてくださいます。これからも導いて下さる、そして再び来られるイエス様を賛美し、感謝するばかりです。

1943年東京・渋谷生まれ。立教女学院小、中、高、山脇服飾美術学院卒。夫 義一さん、長女 栄子さん、次女は結婚して藤田信子さん。

私は主のものです

戸高 真美子

私がイエス様と出会ったのは小学3年生のときです。姉が教会に行き始めたのがきっかけでした。姉に誘われ教会へ行くようになり、イエス様の話を聞いて何も疑うことなくイエス様を信じました。目には見えないけれども、自分を愛してくださっている人がいるんだと思うと、うれしくなりました。

しかし、その頃の信仰は、困ったときの神頼み的なものでした。中学生の反抗期には、家族への憎しみが深まって、自分の罪の部分とイエス様の完璧な清さの部分が、いつも心の中で分裂していました。イエス様から離れた気がして祈れなくなり、悩んでいました。その思いが少し薄らいだのは中学3年の頃、キリスト集会に母が導かれ、私も行くようになってからです。集会で聖書のメッセージを聞き、内側からあふれる理由のない喜びに感激したのを覚えています。

集会に集い始めてすぐに、ドイツの少女リンデの信仰をつづった『実を結ぶ命』という本に出会いました。二足のわらじをはいている私の信仰と、イエス様とひとつになっているリンデの信仰を比べて、リンデをうらやましく思いました。そして病気の大変さもわからぬまま、「こんなにもイエス様の近くにいられるんだったら癌になりたいです。リンデのように喜びたいです。私にも病気の試練をお与えください」と祈りました。この祈りは何年にもわたって続きました。思い返せば、イエス様から離れなかったのは、私の努力や信仰深さではなく、ただ主の憐れみと恵みによる、と思います。

そして、それから7年後の昨年6月、私に卵巣癌が見つかりました。医師から診断結果を告げられて帰宅し、泣きながら母に話したのですが、話し終わった後でハッとしました。かつて「リンデのようになりたい」と祈った、その祈りが聞き届けられたのだ、と気づいたのです。検診を受ける前日、日曜礼拝後の福音集会で「新しく造り変えられる」というメッセージを聞き、私を新しく造り変えてくださいと心から祈ったばかりでした。この病気はイエス様のご計画だ、試練を通して私を新しくされようとしているのだ、と受けとめることができて、心は平安でした。

あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ 4･12、13）

私の病気を知って私以上に打ちのめされたのは、両親と2人の姉でした。私はまだ反抗期の思いを引きずっていて、両親に従いなさい、兄弟を愛しなさい、という聖書のみことばに目を伏せていました。しかし主は、そのことに光を当ててくださいました。家族の涙やひどい落ち込みようを目の当たりにして、初めて私は、いかに家族から愛されていたかを知ったのです。あわせて、愛情も感謝もない自分の罪を思い知らされました。そのことに気づかされ、悔い改めることができたのは、本当に感謝でした。こうして家族一人一人の信仰が病気を通して問われ、結果として私たちは一致して祈れるようになりました。まもなく2人の姉は洗礼の恵みにあずかりました。



2人の姉の受洗を喜ぶ戸高真美子さん（中央）。左は長姉、文絵さん、右は次姉、幸恵さん。御代田の国際福音センターで。

それからの入院・手術にも、完璧な主の守りがありました。主の平安が与えられ、聖書のみことばは**「主ご自身があなたの先に進まれる。･･･恐れてはならない。」（申命記 31･8）**と励ましてくださいました。目の前にイエス様がおられました。手術の何時間か前、私は喜びの涙であふれていて、本当に奇跡のようでした。

術後、癌は転移して進行しているⅢc期で、末期の一つ手前であることを知らされました。医師からは治るのが難しいことや、ホスピスの話も出ました。自分は死ぬかもしれないという現実を、どう受け止めるべきか戸惑っている時、ベックさんが見舞いに来てくださいました。その時いただいたのが次のみことばです。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

（ローマ 14･8）

どちらにしても私は主のものだとわかったとき、うれしくなりました。早くイエス様のもとに行きたい、と喜んで今の自分を受けいれられ、病気になったことに感謝できました。治療が始まり、血液検査で薬が効いているとわかった時は、これからの肉体的精神的な試練を思って、逆に少し落ち込んだくらいです。しかし治療を重ねるほどに副作用がひどくなり、全く食べられない上に、目が覚めるたびに続く吐き気や嘔吐で体力が落ちていきました。一時退院したものの毎日体調が悪く、いつまでこの苦しみに耐えればいいのだろうと、真っ暗闇の中にいるように落ち込んだ時期がありました。聖書も開けず祈りもできない、そんな時にテレビをつけたらイエス様の最後の3日間を映画化した「パッション」がちょうど始まりました。主から見なさいと言われたようで、見るしかありませんでした。初めから涙が止まらず、自分の苦しみがいかに些細なことか思い知らされました。私は周囲に支えられ励まされている環境なのに、イエス様は肉体的な辛さだけでなく、愛している者たちに裏切られ、憎まれている。自分が病気のほかにそんな目にあったら、と思うと涙がとまらず、イエス様の愛と十字架の前に頭を下げるしかありませんでした。イエス様から耐える力をいただきました。

すべて治療を終えて退院したころ、家があって普通に眠ることができ、家族と会話ができるという、今まで当たり前だったことが、考えられないほど恵まれて幸せであることに気がつき、感謝で涙が止まりませんでした。

病気になっても私の内側からは罪しか出ず、イエス様から離れようとする性質は相変わらずです。それでも、生きることは、自分の罪と信仰の戦いを続けることだ、と知りました。治療中の半年間は、くじけそうになっては祈り、立ち直るという繰り返しでした。でも、そのたびに、主が応え、支えてくださるという確信と希望がどんどん増えていきました。どんな時も主が応えてくださいます。信仰は主が与えてくださっています。私はただ自分がどうしようもないものだと正直にイエス様に告白するだけです。信仰を与えてくださいと祈るだけです。

人は試練によってでしか主に近づけないことを知りました。

私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。(ヘブル 12・1)

このみことばにいつも励まされて、忍耐をもって走り続けたいです。そしてまだ主の救いにあずかっていない人たちのために、家族とともに祈り続けていきたいと思っています。

■

1982年埼玉県さいたま市生まれ、滝野川女子学園高、女子栄養大学卒業。

涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう(詩篇 126・5)

樋田 久美子

平成17年、私は勤続30年の表彰を受けました。自分でも信じられないことでした。多発性硬化症(MS)という難病をずっと抱えてきたからです。私はうれしくてたまらず、「イエス様、これまで支えてくださってありがとうございます」と感謝しました。その年、ご褒美の休暇を利用して、入院中に知り合った女性を誘い「ドイツよろこびの集い」に参加しました。ドイツでは親密な交流と自然の美しさを堪能しましたが、帰国1カ月後にMSが再発して、また九州大学病院に入院しました。MSは、中枢神経の髄鞘が溶けて体のいろいろな所に麻痺が出る病気です。症状はさまざまで、全盲の車椅子の患者も多く、再発と一時的な回復を繰り返しながら障害が残っていきます。

私が信仰を持ったのは、このMSという病気を通してでした。20代後半から体調が崩れ、病名がわからないまま苦しんで人生のどん底を感じました。その頃、三浦綾子さんの『道ありき』を読み、病院の聖書研究会に入ったのですが、たまたまそこにあった『光よあれ』という吉祥寺キリスト集会発行の本に出会ったのです。そして、読んで惹かれるものがあったのでキリスト集会の軽井沢キャンプに参加して、本物の信仰の姿を目にしました。

しかし、キリスト集会に集うようになったのは、しばらく経ってからです。それ以前に私は北九州の別の集会で洗礼を受け、その集会に1年間、まじめに通いましたが、体はボロボロに疲れて、ついには礼拝にも出られなくなりました。それでも家で寝て祈っていると平安でした。

37歳の時、左目に中心暗点が出て眼科にかかり、放っておいたら失明するということで40日ほど入院治療を受けました。眼科医からは「多発性硬化症」だと告げられ、根を詰めないように、疲れないように、と言われました。このような病名を知らされると、ショックを受けるのが普通でしょうが、長年うやむやのまま苦しんできた私は、病気

がはっきりしたことでむしろ安堵しました。が、それもつかの間、あわせて受診した神経内科の医師からは「どこも悪くない」と言われて困惑しました。そして、沈んだ気持のまま、東京の吉祥寺キリスト集会の友人に電話したところ、「あなた、主に愛されているのね」という予想もしない言葉を耳にしたのです。病気は、信仰の薄い私を練るために主がくださった愛のプレゼントなのだ、と気づかされて、うれしくなりました。この時、それまでの集会を離れる決心をしました。

私は、専門の神経内科医よりも眼科医の診断を信じる気持が強く、残された時間はあまりないのではないかと、ひそかに思っていました。家族に聖書のことを伝えていなかったので、家庭集会を持ちたいと願って、マンションを借りることにしました。入院中に探し、一人で住むにはもったいないほどの3LDKが見つかりました。すると、ベックさんらキリスト集会の方々が来て、聖書の話をしてくださるようになったのです。小さな集まりでしたが、いつも祝福があり、姉、母、義兄、父、ほかに数人がイエス様を信じ受け入れて洗礼を受けました。こういう生活が7年間続きました。

そのうちに再び体調が思わしくなくなり、安心して住める家を建てようと決めました。土地探しに当たって、「実家と職場の中間にある」「坂がない」「バス停が近い」の3条件を満たす場所が見つかるように祈りました。そしてある日、新聞の土地の広告が目にとまり、翌日その地に行くと、望んでいたとおりの土地でした。でも、周囲の人が皆反対したので迷ってしまい、契約を1日延ばしてしまいました。翌日電話を入れると、すでにその土地は売られていて、ショックでした。土地が手に入らなかったことよりも、主が与えてくださったことを信じずに人の言葉に惑わされた、という自分の不信仰に打ちのめされたのです。しかし、後にその土地は私のものになることになりました。数日後あるチラシを見て、同じ地区なので行ってみようと思い、道に迷いながらたどり着いたら、失ったと思った土地の前でした。信じられませんでした。すぐに不動産屋に電話して、その土地を購入することができたのです。1年がかりで家を建て、狭いながらも庭付きのかわいい家ができました。

1年後に卵巣嚢腫で手術、さらに翌年に乳癌で手術、自宅療養をしながら、家を建てていてよかったと心から思いました。乳癌の放射線治療では、そのたびに足の先から頭のてっぺんまでしびれが来て、ついに歩行障害が出ました。多発性硬化症のためではないかという疑問が頭を離れない私は、何度も主治医に訴えましたが、癌によるうつや、病気をつくりたがる性格と思われたりして、くやしい思いをしました。姉と必死で祈り訴え続けていたところ、主治医は大阪の北野病院を紹介してくれました。そこでも診断はつきませんでしたが、4種類の薬が与えられて普通に歩けるように回復し、みるみる元気になりました。

乳癌の入院中に治験コーディネーター(CRC)にならないかという話があって、復帰の目途もついていないのに無謀にもその話を受けました。CRCの仕事は、承認前の薬を患者さんに飲んでもらい、承認を受けるためのデータをとって新薬開発の手助けをすることです。この職業に就いて6年になりますが、毎年3月になると歩行障害が出るのが悩みでした。受診先をインターネットで探し、九大病院にたどり着きました。わたしは、また「どこも悪くありません」と言われるのではないかと恐れ、次のみことばを繰り返していました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。　(イザヤ 41・10)

ですから、医師から「多発性硬化症でしょう」と言われたときは、ほっとするやら、うれしいやらで涙が止まりませんでした。つい5年前のことです。病名が確定するまでに20年もかかったのです。

この間、母と次のような会話を交したことがあります。「そんなボロボロな身体に産んで、産まない方が良かったかね」「うん、どうせいつかは皆死ぬ運命、私はいろんな経験をして、いろんな人に出会えて面白い人生だったよ」。聖書に出会っていなかったら、多分こんなふうには言えなかったでしょう。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。　(ローマ 8・28)

イエスは言われた。「この病気は…神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」　(ヨハネ 11・4)

聖書のみことばは、つねに真実です。



ドイツよろこびの集いに参加した時に。左、樋田久美子さん。

1952年北九州市生まれ。富野小、富野中、小倉高校、九州大学医療技術短期大学部(現医学部保健学科)卒。社会保険小倉記念病院臨床検査技師、1999年から治験コーディネーター。

［モーセの十戒］11

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック



1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中に
あるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、
父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな
仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それに
あなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる
在留異国人も。—
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいる
すべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は
安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとして
おられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、
あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人の
ものを、欲しがってはならない。」
（出エジプト 20:1〜17）

今回は、モーセの十戒の第九の戒めです。

あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。(出エジプト　20・16)

人間の情報交換は、言葉によって成りたっています。言葉は私たちの考え、感情、意思など多くのものを表現し、伝達します。それに視覚がともなうと、さらに多くの情報を伝えることができます。ラジオやテレビは、ニュースを即時に全世界に伝えることができます。

今日人間は、マスコミの力によって、大きな影響を受ける時代になりました。

また、言葉は恐ろしい力を持っています。ただひとつの言葉が打ちひしがれた者を立ち上がらせ、絶望した者を救い、疲れた者に力を与えることがある反面、ひとつの言葉が人間を裁いたり、非難したり、心を傷つけたり、名誉を損なったり、人生の生きる可能性をすべてだめにしたりすることもあります。

ひとつの言葉は、一瞬のうちに発せられますが、その作用は大きく、いつまでも残ります。

私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。馬を御するために、くつわをその口にかけると、馬のからだ全体を引き回すことができます。また、船を見なさい。あのように大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。

同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。

私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。　(ヤコブ　3・2～12)

このみことばは、信者にとってきわめて大切なことが語られています。信者といえども常に主のご支配のもとにいるとは限らない、という厳しい現実です。

私たちは「間違ったことをする」ことには非常に警戒しますが、「間違ったことを言う」ことは、それほどひどいことだとは思っていません。私たちの言葉のひとつひとつは、ちょうど池に投げ込まれた石のように、影響の輪を広げていきます。もし私たちが、今まで自分が語った言葉の悪い影響を目で見ることができたなら、そのあまりのひどさに驚いて絶望してしまうでしょう。

神のみことばである聖書は、私たちが今までに語ったすべての言葉に対して責任を負わなければならないと言っています。

「わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。」　(マタイ　12・36)

ここにあるように、さばきの日に、いったい誰が聖なる神の前に立つことができるでしょうか。ひと言も間違ったことを言わなかったというような人が私たちの中にいるでしょうか。主イエス様だけが、次のように言うことができました。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」　(ヨハネ　6・63)

私たち人間の言葉は、その多くが自分勝手であり、肉のあらわれであり、時には死をもたらすようなものではないでしょうか。それに比べて、主のことばはなんと聖く純粋で愛に満ち、力を与え、同時に鋭く私たちの心を刺し通すものでしょうか。

「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」　(ヨハネ　17・17)

主のことばは真理ですが、私たちの言葉はどのようなものでしょうか。

蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。　(詩篇　140・3)

十戒のうちの第六、第七、第八の戒めを守ろうとしている人々は、それが行ないだけでなく、言葉によって人を殺し、姦淫し、盗むこともあるのだ、ということを知らなければなりません。

もし間違った偽りの証言によって隣人の名誉を奪うなら、それは盗みではないでしょうか。自分の悪い所は自分の責任ですが、うわさは本人が知らないうちにその人を傷つけます。不用意にうわさをすることはある意味で殺人です。

真実の姿は、ある人は、うわさよりも良い人であり、ある人はうわさよりも悪い人なのです。多くの人々は、周囲のうわさによってひどい状態に陥り、場合によっては、悪口によって人生がめちゃめちゃになってしまい、その心の傷は再び癒されることがないほどになってしまいます。

確かに周囲の人がその人をどう考えるかということは、究極的には大切ではありませんが、悪口によって、信頼が失われると、皆といっしょに仕事をすることは非常に困難になってしまいます。また、良いうわさは、着物のように、その人を守ってくれます。

私たちは隣人の名誉に対して責任を持っています。私たちは、私たちが知っているすべての人の名誉の番人です。人は自己紹介をすると、自分の名前を出したことによってその名誉を皆に委ねることになります。

しかし主は、**「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。(出エジプト20・16)」**という戒めを通して隣人を守ろうとしておられます。偽りの証言は、裁判で証人が事実と違うことを述べることを言います。人の思い、主観で何かを付け加えたり、削除したりすることは、偽りの証言です。

しかし、日常生活において、何と多く、「偽りの証言」がなされることでしょうか。多くの人々は会話の中でしょっちゅう隣人について語ります。たとえ悪気は全然なくとも、隣人や親しい人のことをあまり詳しく話しすぎることは、まずい結果をもたらします。

悪口は人が集まる所ならどこでも語られますが、それは現代の大きな伝染病のようなものです。多くの場合、それは真実でない正しくない言葉であって、それによって隣人の名誉が奪われてしまうのです。

私たちは、ある人について聞いたことを、確かめもせずに、何と簡単に他の人々に伝えてしまうことでしょうか。そしてその結果として、偽りを広め、サタンに利する結果になってしまいます。また悪口は、他人の成功をねたむ気持ちから出ることがあります。この場合の悪口は、「盗み」です。

信者である私たちは、このような闇のわざに加わってはなりません。自分の周囲の人々についての悪口を言ったり聞いたりする誘惑を断固として拒絶しなければなりません。

キリスト者は永遠のいのちを持っている人間ですから、その言葉は人を生かし、力を与える泉でなければなりません。私たちの会話は、言葉の毒を消す働きを持ち、価値があり、心を喜ばせるものであるべきです。

あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。　(コロサイ　4・6)

隣人に対する私たちの態度については、聖書の中にはっきりとした命令が記されています。多く語ることは常に危険です。

「だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。」　(マタイ　5・37)

そして、隣人に対しての態度についても、はっきりと教えています。

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」　(マタイ　7・1～5)

隣人のたましいの医者であれ、というのがイエス様の示された態度でした。

愛と礼儀、祈りと涙をもって、迷えるたましいを導きなさい、と示しています。私たちは隣人の裁判官ではありません。ただイエス様お一人だけが裁き主です。裁判官ではなく、喜びのために働く協力者として、隣人に接することを主は望んでおられます。

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために働く協力者です。あなたがたは、信仰に堅く立っているからです。　(2コリント　1・24)

信者同志の言動についても、この警告は大きな意味を持っています。よく、兄弟姉妹が残酷に別の兄弟姉妹を批判することがあります。主のみからだである教会が、愛のない会話や、偽りの告げ口などによって傷つけられ、分裂し、働く能力を失ってしまうとき、主の痛みと苦しみはどんなに大きいことでしょうか。

もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。　(ガラテヤ　5・15)

次のみことばも覚えましょう。

あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。　(ローマ　14・4)

私たちの思いや舌を、聖霊が支配してくださることは、どれだけ必要なことでしょうか。ただ主お一人だけが私たちの舌を制御し、用いられます。

みことばによって主をほめたたえ、主のすばらしい御名とイエス様の十字架による救いを宣べ伝えることは、何というすばらしい特権でしょうか。

主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。 (詩篇 51・15)

私たちは信者として、時に他の人々の悪口の対象になります。そして、悪魔は信者を損ない、傷つけ、だめにしようとして、好んで他人の舌を利用します。主イエス様も、色々な人々の偽りの証言にさらされ、悪口の的とされました。主イエス様のご生涯は、敵の唇から放たれる矢にさらされる受難でした。人間の偽りの証言は、イエス様を死刑に定め、十字架の死へと追いやったのです。

さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めていた。偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。しかし、最後にふたりの者が進み出て、言った。「この人は、『わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる。』と言いました。」そこで、大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしていますが、これはどうなのですか。」しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「神への冒涜だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。



どう考えますか。」彼らは答えて、「彼は死刑に当たる。」と言った。
（マタイ　26・59～66）

これこそ、「偽りの証言をしてはならない」という第九の戒めに対する最大の罪です。イエス様は確かに人間の偽りの証言の犠牲として殺されました。それ以来、悪魔はイエス様の弟子たちを迫害し、彼らの働きを破壊するため、何度も何度も同じ武器を使いました。イエス様は弟子たちにあらかじめ予告し、とりわけ人々の偽りの証言に対して正しい心の態度を取るように言われました。

「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」　（マタイ　5・11～12）

主に従おうとする者は、みな例外なく聖書に記されているように、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたりするのです。

また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。　（2コリント　6・8）

自分に対する悪口を聞くと、もう主のしもべとして走るのをやめ、福音を宣べ伝えるのをやめよう、という気持ちになるかもしれません。しかし、私たちは人間の言葉に動かされる必要はありません。なぜなら、私たちはイエス様のしもべであり、ただひとりイエス様から命令を受けとる者だからです。

兄弟姉妹から考え抜かれた末に祈って与えられる注意や警告、勧めはみな、私たちにとって、真に価値のあるものであり、主の前における悔い改めと訓練のきっかけになります。しかし、軽々しい悪口や悪意のある偽りの証言は、主のみこころに反し、人々を妨げ、押さえつけたり麻痺させたりするので、言ってはなりません。私たちは主のさばきと判決のもとにあるので、人間の悪意ある証言や判決からは解放されています。

しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。私をさばく方は主です。ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。　（1コリント　4・3～5）

主イエス様は、毒に満ちたひどい偽りの攻撃に対して、少しも弁明しようとなさいませんでしたが、ご自身は「まことに神の御子である」という証言をしておられます。

また、パウロも悪口と批難との激しい闘いを絶えず続けていました。町から町へ、国から国へと、悪口はパウロを追いかけました。パウロは比べるもののないほど攻撃され、その攻撃もこの世の人々からだけではなく、偽りの兄弟からも痛めつけられましたが、常に圧倒的な勝利者でいることができました。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。　（2コリント　12・10）

パウロは自分自身のために自己弁護をしませんでしたが、使徒としての彼の使命の権威が攻撃されたときは、自分の名誉のためにではなく、主によって与えられた福音のために、鋭い武器で戦い通しました。

私たちもまた、主を第一として生きるならば、イエス様やパウロと同じように、多くの迫害を受け、偽りの証言を受けます。

私たちは信者として、しばしばこの世の批判にさらされます。ですからもっとも大切なことは、私たち信者の言動のすべてが、偽りの証言を受けるすきがないように、実際に一致していることです。

外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。
（コロサイ　4・5）

私たちは、私たちの全生涯と誉れを、ただ主の御手にだけ明け渡しましょう。そうすれば、主は私たちを正しく導いてくださり、私たちをひねくれた悪人どもの手から救い出してくださいます。

また、私たちが、ひねくれた悪人どもの手から救い出されますように。すべての人が信仰を持っているのではないからです。　（2テサロニケ3・2）

「主がともにおられる」という聖霊の証言を持つことのできる私たちは幸いです。私たちの全生涯における願いは、主のみこころにかなった歩みをして、いつか将来、私たちの生涯に関する主の判決を聞くことです。

その主人は彼に言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」　（マタイ　25・21）

メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。
（エペソ 6:18）

2006年		7月						8月				9月		
		2日	9日	16日	23日	30日	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日
北海道		重田H	川股	杉本	芳竹	羽石		中山Y	岩本	白石K	藤原N	岩崎	加藤S	岩下
青森			笠井		佐山			藤田E	福島		大場			中山Ch
仙台／盛岡		増森	深沢	松田	福島	蘇畑		高田	高村	片桐	立之	藤田E	菊池	高田H
新潟		清水Y	黒沢	山下	富田	江藤		山徳	岩崎	鈴木T	松下	笠井	長岡	重田H
宇都宮		谷口	鈴木H	羽石	藤井	谷口		斎藤	川股	金井	吉田	野田	松見	御任
日立		藤田E	柿沼Y	平山	和田S	南村		槙野	吉田	上田	山徳	松見	羽石	松田
土浦		南村	青木	松見	大場	古谷T		蘇畑	杉本	和田S	岩本	平山	浅野	青柳
川越		代田	飯島H	古田K	白石Y	野田		野口T	御任	芳竹	江田	大庭	上野	内藤
春日部		川股	藤井	鈴木H	小々馬	辻田H		吉田	大庭	水渡	宮田	西村	辻	会沢
印旛／鹿島		山口I	会沢	笠井	松尾	染野		大野	伊牟田	槙野	滝	末村	会沢	小川
市川		滝	大場	小山	小川	柿沼Y		伊牟田	会沢	大沢A	飽戸	田尾	水渡	小島
東京	10:30	重田S	白石K	野田	青柳	寺田	飽戸	中込	酒井Ch	辻田H	清水Y	古田K	平山	染野
	14:00	小島	水渡	富岡	松見	久田		岡本M	古田稔	蘇畑	石塚	岩本	野口H	江藤
	19:00	黒沢	辻	浅野	古屋	中山Ch		中村K	野口O	小々馬	柿沼Y	旭	田中J	佐山
横浜		兵藤	酒井M	和田S	大須賀	立之		牧野	山田K	古川	中山Ch	菊池	寺田	黒田
相模原		神沢	大高	江藤	石井A	後藤T		菊池	旭	酒井M	古川	牧野	山田K	立之
御代田		長岡	羽石	松下	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	植原	江田	キャンプ	野口O
伊那		羽石	熊谷	平井	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	山田M	織田	キャンプ	末永
富山		仲井間	織田	野口O	平	瀬川		仲井間	大下	平井	松本Y	和田Y	山下	大下
高山			平	大下				大下		植原		長岡		
伊豆		加藤S		菊池					加藤S		青柳		若山	
藤枝			内藤		野田					岩下		金子		小林
掛川		大塚		秋本		金子		染野					岩上	
名古屋／豊橋		辻田H	今村	長岡	津田	山科		松本S	那須	田中J	和田Y	上田	辻田M	滝
石川／福井			山徳		長岡(22)				植原			平		
近江八幡		高村	古田K	高村	藤原T	高村		高村	後藤（地元）	高村	平山	高村	吉田	高村
大阪		森島	長岡	小久保	那須	浅野		広田	高橋Y	山科	岡本M	寺田	中山K	池島
芦屋		松井	野口O	久田	渡辺S	富田		小久保	瀬川	広田	高村	滝	藤原T	森島

2006年

	7月						8月						9月
	2日	9日	16日	23日	30日	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日
西神	小々馬	渡辺S	岡本M	岩崎	池島		中山K	広田	吉田	瀬川	富田	森島	久田
島根	古川		黒田R		古川		福代		岩崎	キャンプ		黒田R	
山口/広島/徳山	渡部	中山K	キャンプ	瀬島	山口H		児玉	芳我	香川	キャンプ	岡本M	上田	山徳
岡山	広橋	久田	キャンプ	内藤	内田H		渡辺S	藤原T	岩本	キャンプ	武井	後藤T	平山
徳島	野間	浅野	キャンプ	山本	菊池		伊野	広橋	池田	中山K	野間	小野沢	北原
坂出	内田H	森島	キャンプ	伊野	武井		広橋	池田	野間	染野	野田F	高嶋	古田K
高知	岡本H	岡本M	キャンプ	吉田	大須賀		窪内	伊野	池田D	脇岡	青柳	金子M	近森
松山／西条	近森	藤原N	キャンプ	岩上	和田Y		光藤	野間	国川	白石K	北原	野田F	内田H
福岡／別府	庄野	青柳	清水Y	浅野	滝		小山田	松井	別所	野田	中野	江藤	重枝
長崎／佐世保	別所	岩本	岩崎	中込	庄野		加藤M	山口H	石井A	重枝	辻田H	辻田M	上田
宮崎／小林	平山	上野	山口H	菊池	田中J		高橋I	藤原N	武井	菅原	河辺	桜本	羽石
鹿児島／熊本	重枝	蘇畑	須藤T	庄野	石塚		別所	加藤M	古田K	古田M	上野	和田Y	岩崎
沖縄／宮古	芳竹	飯守	仲井間	平良K	松見		平良M	喜屋武	青柳	蘇畑	飽戸	岩崎	代田
米国／カナダ＊	未定	未定	未定	未定	未定		未定	未定	未定	未定	未定	未定	キャンプ
バンコク					平山						石井A		
祈り会	**7**／6	13	20	27	**8**／3	10	17	24	31	**9**／7	14	21	28
木曜日	山徳	和田S	小野沢	青柳	重田H	清水Y	小島	岩下	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本
7:30PM～	詩篇48.9-14	詩篇49.1-15	詩篇6-20	詩篇50.1-6	詩篇7-15	詩篇16-23	詩篇51.1-6	詩篇14-19	詩篇52.1-9	詩篇53.1-6	詩篇54.1-7	詩篇55.1-12	詩篇13-23

当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です（日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くもので

変更があり次第、集会のホームページhttp://www.christ-shukai.net/の日曜福音集会メッセージ当番表は変更箇所を更新されます。
最新データはホームページをご覧ください。

2006年 よろこびの集いスケジュール
（下半期）

7月 15(土)～16(日)倉敷
21(金)～23(日)御代田
28(金)～30(日)御代田 日曜学校キャンプ

8月 04(金)～06(日)御代田 5日 よろこびへのコンサート
11(金)～13(日)御代田
18(金)～20(日)御代田 若者の集いキャンプ
25(金)～27(日)御代田

9月 02(土)～03(日)広島
09(土)～10(日)盛岡
15(金)～17(日)御代田
21(木)～26(火)ロサンゼルス
30(土)～10/1(日)石川/福井

10月 08(日)～17(火)ミヘルスベルク

11月 03(金)～05(日)御代田
11(土)～12(日)沖縄
17(金)～19(日)御代田
25(土)～26(日)別府

12月 02(土)～03(日)近江八幡
30(土)～1/2(火)御代田



こちら日立集会で～す from HITACHI

まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。(エゼキエル　34・11)

17年前、現在日立集会に集っている婦人たちの何人かが、ある教会を出て、今後の信仰生活について主の導きを求め祈っていました。ちょうどその頃、吉祥寺キリスト集会の「光よあれ」を読む機会に恵まれました。その本には、牧師制度や献金制度がなく、聖書のみことばだけに立脚して、主イエス・キリストを中心とした交わりを大切にする集会であることが紹介されていました。婦人たちは、そのような集会が現在の日本にあることを知って驚き、一人が吉祥寺キリスト集会の女性と連絡を取って上京し、吉祥寺キリスト集会に集ったのです。そして、自分たちの求めている教会のありかたをそこに見いだした、と感じました。

しかし、日常的に集うには吉祥寺は遠すぎました。しばらくして、1991年4月7日に、ベックさんご夫妻が大洗町の飛田ひろみさん宅で家庭集会を持たれるということを聞き、日立から数人の婦人が参加しました。この家庭集会を契機にして、隔週土曜日に日立で家庭集会が持たれるようなったのです。主が道を開いてくださった、としか考えられません。吉祥寺集会からは、仕事で忙しい男性の皆さんも自主的に、喜んで日立まで来てくださいました。それは私たちには驚きであり、感謝の気持ちでいっぱいでした。

家庭集会が始まって1年後には、2人の男性が信仰に導かれ、また吉祥寺集会に集っていたご夫妻の家族が近くに転居して来られたこともあって、まず常陸太田で、しばらくして日立で礼拝が持たれるようになったのです。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。(1コリント　2・9)

現在、日立集会には約20人が集っています。日曜日の礼拝は日立と常陸太田の2カ所で交互に持たれており、雰囲気は家庭的です。

家庭集会だけを持っていた時期だけでなく、礼拝が持たれるようになってから今日に至るまで、さまざまな面で奉仕してくださり、祈ってくださり、交わってくださっている多くの皆様に感謝します。イエス様はご自身のみからだなる教会を愛されたというみことばは、私たちの集会においても真実です。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。(ローマ　8・28)

毎年3月に持たれている「大洗よろこびの集い」で、多くの方々にお目にかかり、交わりの時が与えられますことを楽しみにしています。

(槙野　忠秋、藤田　瑛二)

2005

11/2 上田 裕樹・美帆





11/5 弟子丸 将・恵実子

11/19 橋本 耕太郎・至芳





1/21 渡辺 良孝・麻紀

2006



1/28
玉城 慶之・貴美子

3/5
河合 良亮・麻里子





3/18
打出 喜代文・昌子

私の神は、キリスト・イエスにある
ご自身の栄光の富をもって、
あなたがたの必要をすべて
満たしてくださいます。 ピリピ 4・19

Wedding

結婚式

結婚式と葬儀のご報告

Funeral

葬儀











2005

05/14 中野 剛
11/08 諸岡 裕介
11/22 真嶋 一男
11/26 田谷 栄
12/07 姫崎 正雄
12/07 大谷 ノブ子
12/15 片山 翔太
12/21 阿佐見 照子









2006

1/06 野田ヒロ子
1/31 村田 タヤ子
2/05 上松 連子
2/24 石森 富太郎
3/07 浅川 和夫
3/08 中越 滋
3/21 小林 さい
3/27 加藤 榮
3/29 浅野 善子
4/05 下地 雅治
4/18 森下 茂















しかし 私にとっては、
神の近くにいることが、
しあわせなのです。

詩編 73・28









Information Box
[インフォメーション・ボックス]



主の祝福と若者の喜びに満たされたバンクーバーの集い

毎年3月下旬の春休みシーズンに開かれる「バンクーバーよろこびの集い」は、若者の参加が多いことが特色です。2006年の集い（3月23日～28日）も、日本から参加した60人のうち34人が独身者でした。

今回は観光ゼロの日程が組まれ、たっぷりの自由時間を若者たちはもっぱら親密な交流に充てました。特に2日目は皆が車座になり、「自分の罪って何だろう？」「あなたの隣り人をあなた自身のように愛せよ、というみことばをどう思う？」などの問いをめぐって意見を出し合いました。

でも、一番のハイライトは10人の「証し」でした。長岡慧、古屋和宣、田中桃子、黒田三恵、原朋子、上田容子、海老根純子、竹澤真平、大庭奈緒、古屋知紀（敬称略）ら、ほとんどが20歳そこそこの方々ですが、それぞれに「どのようにしてイエス様と出会ったか、その結果どう自分が変えられ、どんな恵みをいただいたか」を語ってくれました。その素直で正直な告白に感動して涙する女性の姿も見られました。

最終日、若者たちは満ち足りた表情で「最高！」「帰りたくないなあ」「昨晩、初めて一人で祈った」「こういうお交わりを日本でもしたい」「友達がたくさんできたし、いろいろ話すことができた」「いろいろ考えさせられた」などと感想を口にしていました。なお、期間中に12人の若者が、ベックさんとの交わりなどを通して、初めて祈るようになりました。

バンクーバーよろこびの集いは2007年も同じ時期に開かれます。

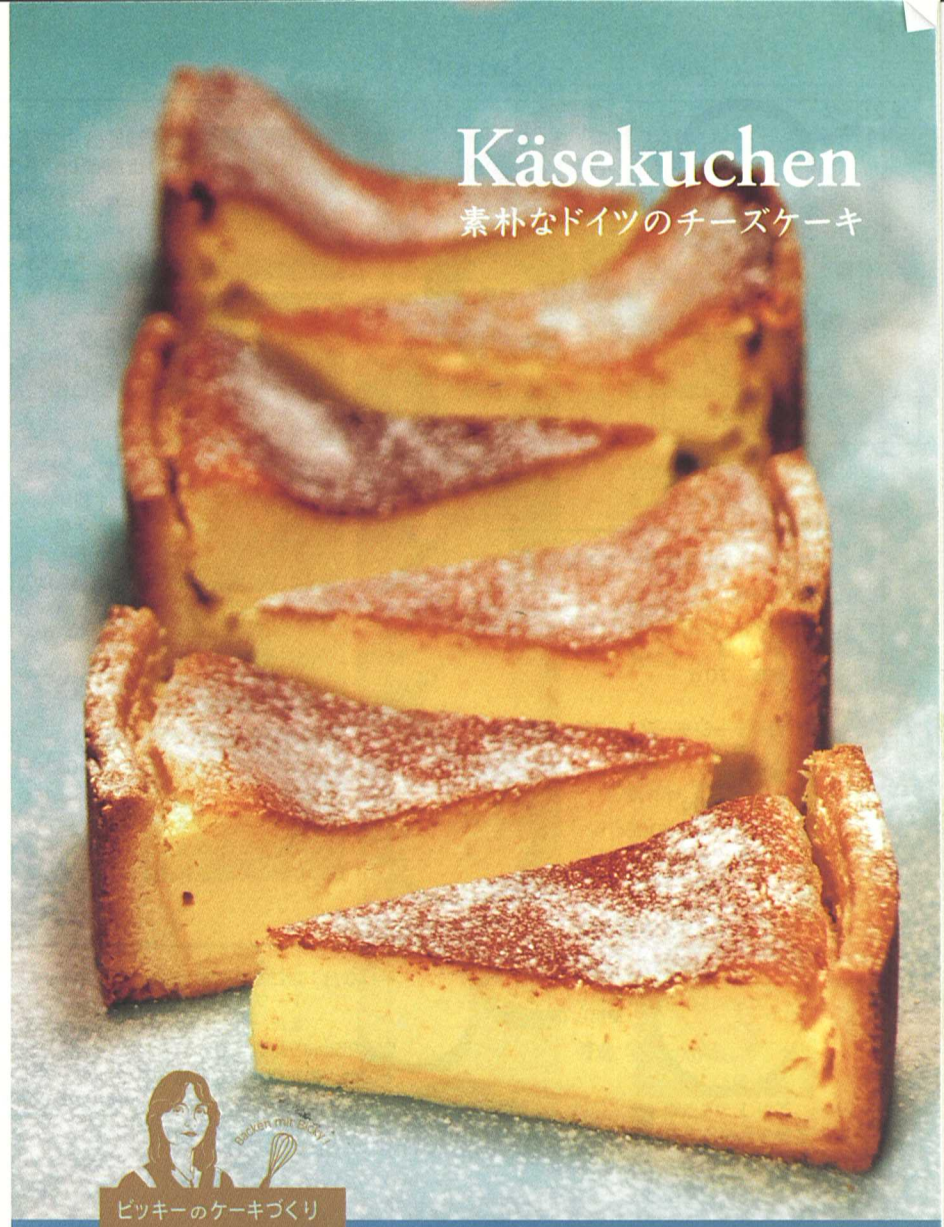


「待ちに待ったその日を迎え…」と故人が葬儀で“挨拶”

2006年1月31日、芦屋キリスト集会所で行なわれた故村田タヤ子さんの葬儀で、当人の声が会場のスピーカーから流されました。生前に録音した挨拶です。村田さんは1月29日、がんのため83歳で天に召されましたが、昨年までにお仕事や財産などをすべて整理していました。

挨拶は、主の恵みに対する感謝、キリスト集会の方々のお見舞いや祈りへのお礼、病床で平安を与えられていることなどを述べた後、次のように喜びを語っていました。

「故郷である天の御国へ引き上げてくださる、待ちに待ったその日を迎えることができました。苦しみも悲しみもなく、最高です。最後に、お一人お一人の信仰が豊かに実り、主がお建てになった芦屋集会にますます主の御栄光が現わされますように、と天の御国よりお祈り申上げております。皆様、お忙しい中ご出席くださり、ありがとうございました。では、いつの日か天国でお会いするまで、さようなら。」



Käsekuchen
素朴なドイツのチーズケーキ

ビッキーのケーキづくり

チーズケーキにはいろいろなレシピがありますが、
これはドイツの田舎の家庭で、日常的に作られているものです。
カッテージチーズは、ドイツではよくパンに塗っていただく身近な食材。
チーズケーキの材料としてポピュラーなクリームチーズに比べて
乳脂肪分が少ないので低カロリー。軽い仕上がりになります。
レモンのさわやかな風味とタルトの香ばしさが後を引き、
いくらでも食べられてしまうおいしさです。



材料

《生クリーム以外は すべて常温にしておく》

台生地
- 小麦粉　250g
- バター（有塩で良い）125g
- 卵　1個
- 砂糖　70g

中身
- カッテージチーズ　500g（裏ごしタイプ）
- 卵　4個
- 砂糖　200g
- 生クリーム　200cc
- 小麦粉　大さじ2
- レモンの皮　1個分
- バター　50g



裏ごししていない
カッテージチーズは
裏ごししてから
使用してください

作り方











《台生地を作る》こねパイ式
小麦粉はふるっておく

1. ふるった粉を 台の上に
こんもりと置き
中央をくぼませ
卵、砂糖、バターをのせる。

2. スプーン等で
粉をくずしながら
切りまぜていく

3. バターが細かくなって
粉によく混ざったら
手早く一つにまとめる

ポイント
さっくりとおいしく
仕上げるには
バターが溶ける前に
手早くまとめる

4. ラップをして冷蔵庫で
30分～1時間
休ませる

この状態で何日間か
冷蔵庫で保存しておく
ことができます

道具

平らな台：ここでは人工大理石の板を使用しているが
テーブル、ベニヤ板、クッキングマットなどでも良い
また、作り方1.～3.はボールの中でも作業できる
型：26cmの丸型 1個分 または 20cm前後の丸型 2個分
その他：めん棒　泡立て器　パイカッター















《型に生地を敷く》
焼き型にバターを塗っておく

5. うすく打ち粉をした
台の上で
生地をめん棒でのばす

6. 焼き型よりひとまわり
大きくなったら
生地に粉をふり
2つ折りか
4つ折りにたたむ

7. 生地を焼き型の上に
のせて広げる

8. 型の底と側面に敷き詰め
縁もきれいに
手で押さえる

9. 縁をパイカッターや
ナイフ等で まっすぐ
切りそろえる

10. フォーク等で
生地に穴をあけ
ラップをして
冷蔵庫に入れておく















《中身の材料をまぜる》
オーブンを180℃にあたためる
バターを溶かしておく

11. 全卵に砂糖を2～3回に分けて
入れ、泡立て器で白っぽく
なるまで混ぜる

12. 順番に材料を加え混ぜる
カッテージチーズ
を入れ混ぜる

生クリーム
を入れ混ぜる

振るった粉と
レモンの皮を削って入れ
混ぜる

溶かしバターを入れ
混ぜる

《中身を型に入れて焼く》

13. 台生地の上に
中身を入れる

14. 180℃のオーブンで
60分くらい焼く

ポイント
型をかたむけて
固まり具合を見る
中央に竹串を刺して
生地が付いてこなければ
焼き上がり

15. 焼き上がったら少しおき
冷めるのを待って型から出す

ポイント
焼き上がりは全体が
ふくらんでいますが
冷めると中央が沈みます

冷めてからラップをして冷凍保存できます
ホールでもカットしたものでも大丈夫です

Käsekuchen
素朴なドイツのチーズケーキ